

研究紀要

第17号

◇ 学力の向上を目指した取組



平成27年5月

鹿児島県立鹿児島聾学校

目 次

はじめに	1 P
I 研究の概要	2 P
II 幼稚部の研究	4 P
III 小学部の研究	16 P
IV 中学部の研究	33 P
V 高等部の研究	48 P
VI 寄宿舎の研究	63 P

※ 表紙絵 平成26年度障害者雇用支援月間ポスター「小学校の部」厚生労働大臣賞
受賞作品（本校小学部4年児童）『道路の安全を守る白バイ』

はじめに

特別支援教育が制度化されて8年が経ち、現在、共生社会の形成に向けた「インクルーシブ教育システムの構築」のための取組が全国各地で進められています。その中で、障害のある子どもが、他の子どもと平等に「教育を受ける権利」を享有・行使することを確保するための「合理的配慮」の実践例も蓄積されつつあり、各特別支援学校では、対象とする障害種に応じた教育内容・方法等の配慮が具体化されてきています。

一方、聾学校（聴覚特別支援学校）においては、人工内耳を装用した子どもに対する新たな指導方法の開発や手話言語法の制定を求める意見書の提出の動き、そして在籍幼児児童生徒数の減少に伴う他障害種との併置化の動きなど、時代背景を受けた新たな課題への取組が求められています。

このように、特別支援教育全般そして聴覚障害教育が、これまでの歩みや貴重な実績を踏まえつつも新たなステージへ移行することが求められる時代において、より高いレベルで堅持・発展させるべきものは、私たちの専門性に他なりません。それは、単なる知識の獲得や経験の積み重ねに依存するものではなく、毎時毎時の授業において実践力として発揮されるものであり、目の前の子どもたちの具体的変容を基に積極的改善が加えられるべきものと考えます。

本校では、より高いレベルで堅持・発展させるべき専門性を「授業力」そのものにとらえ、その中心命題を「学力向上」に置いて研究・実践を進めてまいりました。聴覚に障害のある子どもにとって、聴覚から入ってくる情報の不足を多様なコミュニケーション手段や読み書きの力等によって視覚的に補い、確かな概念や学力としてその定着を図ること。そして、その指導を通して身に付けた基礎学力やコミュニケーションの力を、社会性育成の基盤として活用しながら、全人格的な発達を促進していくことはとても大切なことです。

聴覚障害教育におけるこのような学力向上の重要性や独自性に鑑み、本校では、4学部と寄宿舎において、それぞれの発達段階や特性に応じた具体的取組を探ってまいりました。具体的には、幼稚部において「ことばでの表現」に、小学部では「書く力」に、中学部では「国語力」に、高等部では「教育課程編成」に、寄宿舎では「生活の中のことば・知識」にそれぞれ視点を当てて実践研究しています。

このような各学部・寄宿舎における取組は、上述した「目の前の子どもたちの具体的変容を基に、自己の実践に積極的改善を加えていきたい」という本校職員の想いと意欲がベースにあり、3年間の集約として今回本紀要を発刊する運びとなった次第です。本紀要が、本校在籍の幼児児童生徒だけでなく、県下の聴覚に障害のある子どもたちの指導実践の参考として寄与できれば幸いです。

なお、本校では、本研究の成果を継承する形で、平成27年度から「確かな学力、コミュニケーション力定着のための授業づくり」という研究主題を設定し、ICT機器の活用や教科を横断する指導技術の整理、教科の特性に応じる指導法の開発等の新たな実践課題に取り組むこととしています。皆様方には、本紀要を御高覧いただき忌憚のない御意見や御批評を賜りますとともに、本年度からの新たな取組につきましても御指導・御支援いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成27年5月

校長 釘田雅司

I 研究の概要

学校研究主題

学力の向上を目指した取組

研究主題設定の理由

現在、変化の激しい社会を生きる子どもたちには、「生きる力」を育むことが必要とされている。とりわけ「生きる力」を支える柱の一つである「確かな学力」の育成を図ろうとする考え方は、平成8年の中央教育審議会答申以来、一貫したものとなっている。

「確かな学力」については、現行の学習指導要領の改訂に向けた中央教育審議会の審議の中で、知識・技能に加え、自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力と明示された。また、その「確かな学力」を飛躍的に向上させるための総合的施策として平成15年度から『学力向上アクションプラン』を実施し、個に応じた指導の充実、学力の質の向上、個性・能力の伸長、英語力・国語力の増進を図る取組を推進している。学力低下が叫ばれる学校教育において、揺るぎない基礎・基本の定着、思考力・表現力・問題解決能力の向上、生涯にわたって学び続ける意欲、得意分野の伸長、旺盛な知的好奇心・探求心が強く求められているのである。

近年、聾学校においては、全国的に幼児児童生徒の減少、障害の重度・重複化、進路の多様化等が急速に進んでいる。特に聾学校の今日的課題として、早期教育と適切な就学指導、障害の重度・重複化に対応した指導の在り方、多様な進路選択を指向した基礎学力の向上、学科再編や専門教科・科目の設定の改善、厳しい雇用情勢並びに職場定着率の低下、コミュニケーション手段等に関する諸問題が指摘されている。

本校では「聴覚口話法を基盤として、言語力・コミュニケーション能力・学力の向上を図り、豊かな感性と心身の調和のとれた人間性を培い、『生きる力』を身に付けさせるとともに、自立し、社会の発展に貢献できる人間を育成する」ことを教育目標として、幼稚部から高等部専攻科まで一貫教育を行っている。その中で、現行学習指導要領の趣旨を十分に踏まえ、各学部で教育課程を編成してきている。各教科においては平成22年度より教科等部会を開き、一貫性の在り方について検討し、基礎学力・応用力の向上、言語力・語彙力の向上等が課題であることを確認した。また、平成24年度から表現力や語彙力の拡大を目指し、「書く指導」に視点を当て、各教科で取組を進めてきた。「ことば」や「学力の定着」については、本校の往年の課題であり、これまでも様々な取組がなされてきている。

そこで、平成24年度から3年間の学校研究テーマを「学力の向上を目指した取組」とし、それぞれの学部の具体的な取組を副題として設定することとした。その中で、各発達段階での学力のとらえ方をまとめ、「生きる力」としての学力の向上を図っていきたいと考え、研究に取り組むこととした。

※ 高等部においては、特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究として「専門高校等との交流授業やデュアルシステムを活用した教育課程の編成」を研究テーマとし、高等部単独での研究を進めた。

【学習指導要領】

生きる力をはぐくむことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うために、言語活動を充実させる。

【校訓】

よく話し ことばで考える 豊かな子

【学校教育目標】

聴覚口話を基盤に、個に応じたコミュニケーション手段を用いて、言語力、コミュニケーション能力、学力の向上を図り、「生きる力」を身に付けた、心豊かでたくましい人間を育成する。

【めざす幼児児童生徒像】

- ・ 健康な身体と豊かな心をもつ子ども
- ・ 話のわかる、話のできる子ども
- ・ 自分の考え、すすんで学習に励む子ども
- ・ きまりを守り、規則正しい生活のできる子ども
- ・ すすんで働き、みんなと仲良くできる子ども

【拡大教育課程係会】（教科等部会まとめ）

基礎学力の向上、応用力の向上
言語力・語彙力の向上
言語の理解を促す
英検・漢検への取組 など

教育課程 実態把握
評価シートの活用 など

平成 23・24 年度
「書く指導」を通して、
表現力や語彙の拡大等を
目指す。
平成 25 年度
思考力・表現力につながる
言語活動を充実させる。

これまでの研究実践の成果と課題（テーマ研修係反省）

- ・ 確かな日本語力の育成のための研究（全体研究）
（平成 18 年度～平成 20 年度）
- ・ 「個別の指導計画」をキーワードに各学部での研究
（平成 21 年度～平成 23 年度）

【学校研究主題】

学力の向上を目指した取組

【各部の研究サブテーマ】（平成 24 年度～平成 26 年度）

幼稚部	「豊かなことばで表現する子どもを育むかかわり方の研究」 ～ 絵日記・絵本の場面に視点を当てて ～
小学部	国語科「書く力」を育てる指導を通して
中学部	国語力を育てるための取組
寄宿舎	生活の中で豊かなことば・知識を育てる取組を通して
高等部	専門高校等との交流授業やデュアルシステムを活用した教育課程の編成

幼稚園の研究

II 幼稚部の研究

1 研究主題

「豊かなことばで表現する子どもを育むかかわり方の研究」

キーワード：「口声模倣」、「絵本の読み聞かせ」、「絵日記指導」、「話し合い活動」

2 主題設定の理由

平成24年度からの3年間、全体研究の「学力の向上を目指した取組」というテーマを受け、0～5歳児の子どもたちの保育・教育活動や教育を担う幼稚部では、「学力」を「いきいきと生活する力」ととらえて研究を進めた。

幼稚部段階における「いきいきと生活する力」は、幼稚園教育要領の5領域（健康・人間関係・言葉・環境・表現）が、身近な人・環境とのかかわりなどを通して、相互に関連し合いながら獲得されていくと考える。今回の研究では、表情、指差し、身振り、口話など含めた広義の「ことば」に視点を当てて取り組んだ。ことばは、笑顔や指差しなどで自分の気持ちを表出する前言語段階から、二語文以上の構文で思考したり、話し手の意図や状況を理解しながらやり取りをしたりする段階まで様々だが、どの発達段階においても生活全般に深くかかわっているととらえる。

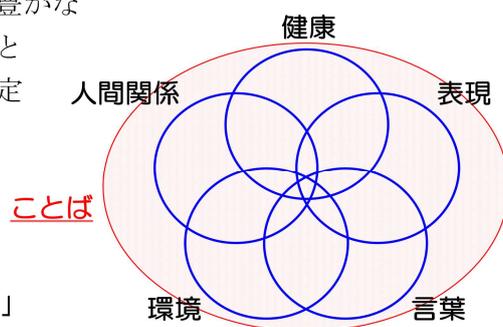
生活の中で伝えたいことを、自分のことばで豊かに表現できるようになることが、「いきいきと生活する力」につながっていくと考え、豊かなことばで表現する子どもを育むための教師のかかわり方についての研究を進めた。

人は生まれたときから周囲の人が話すことばをきき、次第に真似て声を出し始める。自分で発したことばを自分できくことで、さらに次の発声へとつながるフィードバックを行いながらことばを獲得していく。聴覚に障害のある子どもは、そのフィードバックする力が弱いために、ことばを覚えることが難しい場合が多い。しかし近年、補聴器の性能が良くなってきたことや人工内耳装用児が増加していることもあり、聴覚活用がうまくできている子どもが増えてきている。聴覚口話法を基盤に、後の学力につながるようなことばを育むためには、意図的にフィードバックができる口声模倣が最も適した技法の一つであると考えた。

そこで、1年目は、教師が口声模倣の誘い方を理解し、子ども一人一人の課題に合わせたかかわりができるようになれば、気持ちや状況に合わせて自分のことばで表現できる子どもを育むことにつながると考え、口声模倣に視点を当てた。

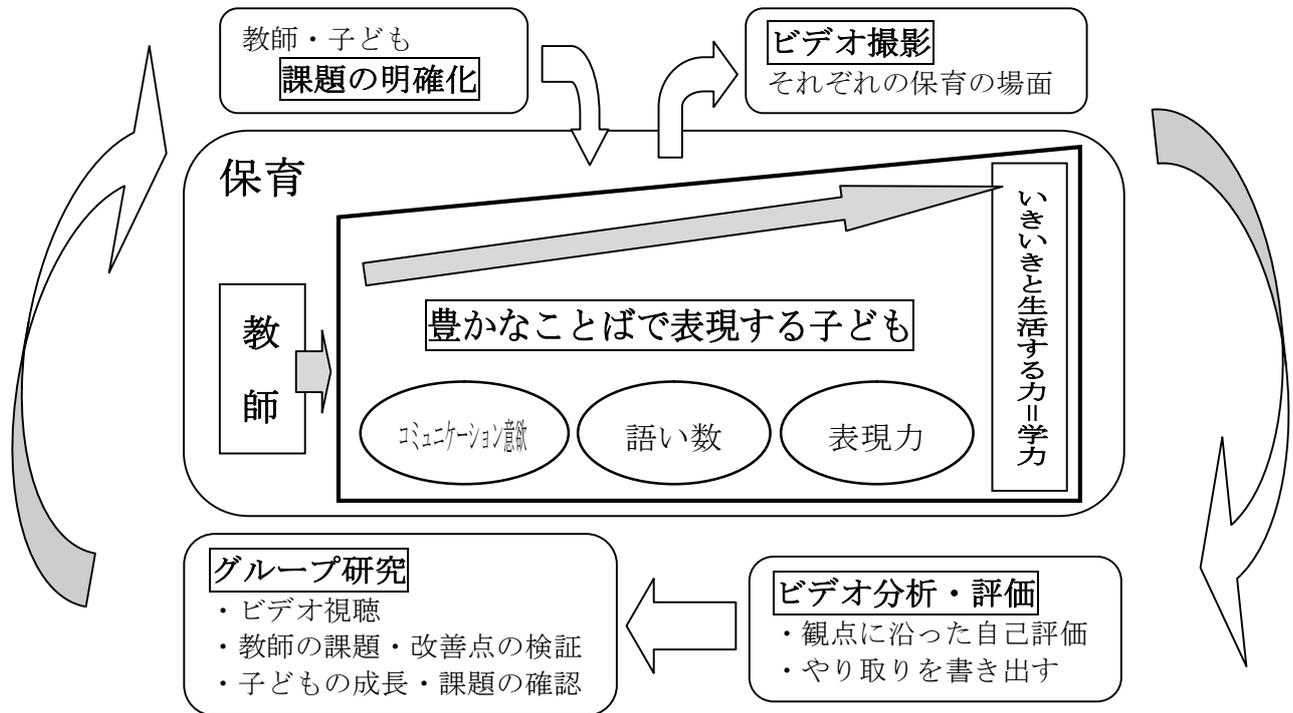
2、3年目については、1年目の研究をベースに、0～2歳児では「絵本の読み聞かせ」、3～5歳児では「絵日記指導」「話し合い活動」の場面で、一人一人の発達段階に応じた豊かなことばを定着させたり、子どもの表現力や思考力をより高めたりするための教師の発問や言葉掛けの質、かかわり方についての研究を進めた。

この研究を通して、口声模倣の誘い方、発問や言葉掛けの質、かかわり方についての教師の指導力が向上することで、子どもが発言したくなる、子ども中心の保育を展開することができると思う。その中で子どもの表現の質や思考力が高まり、豊かなことばで表現する子どもが育成されることで、いきいきと生活する力、ひいては学力の向上につながっていくと仮定した。



3 研究の内容・方法

保育の場면을ビデオで撮影し、各観点に沿って分析しながら、次の保育につながる課題や改善点を探っていく。また、教師の指導の変化が子どもに与える影響について検証するために、子どもの変容の分析を行う。



(1) ビデオ研究

ア 0～2歳児

「絵本の読み聞かせの場面」を取り上げる。絵本の場面は、読み手である教師との共感や視線の共有、指差し、発声など、子どもからの表出を受けとめる場であり、より多くの表出を引き出しやすい場でもある。

やり取りを展開する中で、生活の中に生かせることばを、子どもからより多く引き出せるような絵本の提示の仕方、教師のかかわりの意図、表出の促し方について検証していく。

イ 3～5歳児

「絵日記指導の場面」、「話し合い活動の場面」を取り上げる。絵日記は、子どもが実際に経験したことを、大人と一対一でやり取りする場である。伝えることの楽しさを味わいながら、新しいことばや表現を獲得する喜びを知る機会にもなる。話し合い活動は、子どもの身近な話題を取り扱うことで、子どもが自ら進んで話をしようとする場である。自分の経験したことや意見を伝えることはもちろん、子ども同士のやり取りを深めることができる。

これらの場面で、口声模倣の誘い方、発問や言葉掛けの質、教師のかかわり方について検証していく。

(2) 子どもの変容の分析

ア 0～2歳児

視線、指差し、身振りサイン、発声などの子どもの表出や、興味・関心、態度などの様子を観察する。

イ 3～5歳児

学期末に「ことばのあゆみ」*1をチェックし、獲得語い数の変化や品詞のバランスを調べる。

*1:「ことばのあゆみ」は、『くもんの絵ことばじてん』（くもん出版)を参考にし、本校で作

成したものである。幼児（主に2～6歳児）の日常生活の上で基本となる約1,500語を収録している。

4 研究経過

	日 程	主 な 内 容
一 年 目	4～5月	・本年度の研究テーマについて ・本年度の研修の説明，具体的な進め方
	6～12月	・ビデオ研究（グループごと）
	1～3月	・本年度の研究のまとめ
二 年 目	5月	・本年度の研修について
	6～12月	・ビデオ研究（グループごと） ・中間報告会
	1～2月	・ビデオ研究（グループごと）
	3月	・本年度の研究のまとめ
三 年 目	5月	・本年度の研修について
	6～1月	・ビデオ研究（グループごと）
	2～3月	・本年度の研究のまとめ ・3年間の研究のまとめ

5 研究の実際

(1) 口声模倣に視点を当てた1年目の研究

ア ビデオ研究

0～2歳児と3～5歳児に分けて口声模倣を評価する観点を定め（表1），教師が観点に沿って口声模倣を誘っている場面（1分～3分程度）を分析し，グループで検証した。

表1

旧観点（6月～10月）	新観点（11月～2月）
A・Bグループ（3～5歳児）	
A：口声模倣を誘っているか （同時模倣，時差模倣） B：文節数が適切か （子どもの実態に合っているか） C：子どもの意図をくんでいるか D：正しい構文を意識しているか （例：助詞，動詞の活用） E：品詞（動詞，名詞，形容詞）のバランス （語いの増加，拡充模倣） F：発音	A：口声模倣を誘ったところ （同時模倣，時差模倣） <u>同時模倣</u> 回， <u>時差模倣</u> 回 B：文節数は適切だったか （子どもの実態に合っているか） <u>文節数</u> ： _____ <u>文節</u> C：子どもの意図をくんだことば， <u>押さえないことば</u> の 口声模倣であるか D：構文は整っていたか（例：助詞，動詞の活用） E：意識した品詞や <u>言い回し</u> F：発音を意識した口声模倣だったか， <u>キューサイン</u> や <u>発音誘導</u> の活用
Cグループ（0～2歳児）	
A：ミラリングをしているか B：モニタリングをしているか C：身振りを誘っているか D：発声・ことばを誘っているか E：誘っている身振り・発声・ことばが適切か （子どもの実態に合っているか） F：子どもの意図をくんでいるか	A：ミラリング B：モニタリング C：身振りの誘導 D：発声・ことばの誘導 E：実態の適切さ F：子どもの意図

- (ア) 6月は、口声模倣や意識してかかわっている場面を中心に、2～3分程度ビデオを起こし、そのやり取りを記載した「ビデオ分析シート」を作成した。「ビデオ分析シート」を旧観点で分析して作成した「ビデオ記録用紙」を基に、グループ研究を行った。全員1回ずつ実施した。
- (イ) 12月は、1～2分程度ビデオを起こし、そのやり取りを記載した「ビデオ分析シート」(表2)を作成した。それを新観点で分析して「ビデオ研究記録用紙」(表3)に記入して、グループ研究を行った。全員1回ずつ実施した。
- (ウ) 1月は、グループの事例対象児について、1回目のビデオを新観点で分析して「ビデオ研究記録用紙」に記入し、グループで新観点に沿って課題や具体的な改善策について話し合った。
- (エ) 事例対象児について、グループごとに6月と12月の教師や幼児の変容、教師の今後の課題について検討し、まとめた(表4)。
- (オ) 年度末に報告会を実施し、各グループ1事例ずつのビデオ視聴と報告を行い、学部全体で共通理解を図った。

表2

ビデオ分析シート			
撮影日	クラス	指導者	対象:〇児(3歳児)
2.4. 1.2. 1.2 (ホ)	自話個別	〇〇〇〇	〇〇〇〇
幼児名	子どもの行動・発言	教師の行動・発言	考えられる改善点
R	「おーあい(交代 私) 「もーいっあー お うわー(もう一回 する)」	「あー、うん?」※視線が合わない。 もう一度確認 「えっ?先生がもう一回?先生がもう一回?」	・ まずは気持ちを受け止めて「うんしようね」と肯定して返す。 ・ 「もう一回をする」を「もう一回する?」で模倣を誘う。 口形「する:(うあ)を(うう)にする。
R	(首を振り西を指さす) 「あうお(進ったと気付く音を振るま(ま)い(ま)うお(こ)うんうえー(先生) <(め) >あ(め)おお(もう一回) ううお(する)」	「するんだねー」 「じゃあ集めて集めて(紙を集める)」 「あー」 「集まれ集まれ(紙を集める)」 「じゃあ おおててに手を広げる)乗せて(乗せる) よいしょ(手に乗せる仕度)」 「オッケー いいよ」	・ 言い終わるまで視線を合わせよう! ・ Rが言ったことをもう一度正しい発音で聞かせ、口形も見せる。 ・ 「集まれ」は口形のみが正しい。 ・ 「先生の手」を覗き取らせてもよい。 ・ 聴かせていない。聴かせる意識。 ・ 声が届いていない。「全部乗せた」などバラレトクで口声模倣を誘う。
R	「あー うふ(笑)」 「あっぶ(紙を集める)」		
R	(西の手に紙を乗せる) <「よいしょ」 >		
R	(小さい紙を給って乗せる)		
R	(西を見る)		
R	「ばあ」		
R	「えー」		

表3

ビデオ研究記録用紙 (A グループ)				
撮影日	12/12	クラス	自話	〇児(3歳児)
指導者	〇〇〇〇	4回目		
話題: 自立活動の個別指導 「ハ行」の口唇破裂の息遊びで、紙吹雪を飛ばす。教師と交代して遊んでいる。				
口声模倣で特に意識して取り組んだ点 ・ パターンになった文型(文未)を、口形の違いを意識させて口声模倣を誘う。 ・ 発言の際は、必ず音声に伴わせる。 ・ 自分から言える言葉にする。				
この場面から見えてきたこと (A: 口声模倣を誘ったところ(同時模倣、時差模倣)) 同時模倣 7回、時差模倣 回 助詞を入れた言葉の口声模倣を誘っていない。子どもが言いたいことを全部言い終わってから、口声模倣を誘う。途中で誘うと、構文が途切れ、全部をまとめて言うことができない。全文言うことで助詞の使い方を覚えることができる。音声と口形、身振りや指文字どちらを意識させて誘っているのはつきりさせる。口形「する:(うあ)を(うう)に変える。 「牧子先生がもう一回するよ」「牧子先生 交代しよう」「全部乗せた」など、誘ったほうがよい。 (B: 文節数は適切だったか(子どもの実施に合っているか)) 文節数: 1～2文節 本児が「牧子先生がもう一回するよ」と3文節文で言っているのに、3文節文以上の口声模倣も誘う。そのときには単語レベルでも言える言葉にすること。「牧子先生 交代しよう」「Rと交代しよう」など。 (C: 子どもの意図をくんだ言葉、押さえた言葉の口声模倣であるか) 子どもがやりたい場面だったので、「交代…」は子どもの気持ちに合っていた。最終的には「交代し				

表4

ビデオ研究を通して まとめ (A グループ)	
教師の変容 ※今後の課題	子どもの変容
A: 口声模倣を誘ったところ(同時模倣、時差模倣)	
・ 口声模倣が習慣になり、言葉そのものだけではなく、「ん?」のような間を作って模倣を誘う場面も出てきた。口形を見せて、その違いを見せようとする意識するようになった。 ※ 本児が言いたいことを全部言い終わってから、助詞を入れた3文節文程度で時差模倣を誘う。	・ 教師が胸に手を当てて見ると声が出る(頭声)段階から、口声模倣を誘われていることが分かり、口形をよく見て、3文節以上の模倣ができるようになってきた。 ・ 単語の音数は3音程度までだと一息で言うことができる。
B: 文節数は適切だったか(子どもの実施に合っているか)	
・ 単語レベルの同時模倣から、1～2文節文で模倣を誘うようになってきた。本児が言いたい言葉の表を変えながら模倣を誘うようになった。 ※ 3文節文以上で助詞を入れて誘った口声模倣を誘う。単語レベルでしっかり言えるような言葉を選び、時差模倣を誘いながら定着を図る。	・ 身振りで表出が中心で、声が出て頭声だったが、1～3文節の同時模倣・時差模倣ができるようになってきた。 ・ 単語の音数は3音程度までだと一息で言うことができる。
C: 子どもの意図をくんだ言葉、押さえた言葉の口声模倣であるか	
・ 教師主体の言わせたい言葉から、子どもの気持ちをくみ取って言語化し、ゆっくり聞かせ模倣を誘うようになった。 ※ 細かな動作や気持ちの言語化をして口声模倣を誘う。	・ 名詞や動作そのものが言葉になっていて、教師がそれを言葉に変えたり、教師の質問に答えたりしていたものが、気持ちを声に出して伝えようとし、その言葉で口声模倣できるようになってきた。
D: 構文は整っていたか(例: 助詞、動詞の活用)	
・ 単語をしっかりと誘えるように、何度も模倣を誘っている。まだ助詞を入れて意識を高めようとする構文が少ない。 ・ 一問一答でのやりとりをしている。	・ 自発的に助詞「へ」を入れた3文節文で話すようになった。

イ 子どもの変容の分析

0～2歳児では、事例対象児について、視線の共有、指差し、身振りサイン、表出できることばという視点で、年度末での成長をまとめた。

3～5歳児は、学期ごとに「ことばのあゆみ」をチェックし、学期ごとの獲得語い数の変化（表5）と、年度末での獲得語い数の品詞のバランス（表6、7）を調べた。

(ア) 0～2歳児

a 視線の共有

6月は提示した教材等への興味が強く、人に向ける視線は少なかった。1月には、提示した教材等に対する気付きを担当や母親に伝えたいという思いが育ち、視線を合せて共感できる場面が増えた。

b 指差し、身振りサイン

6月は、「あ」という発声と指差しで気付きや意思を伝えていた。1月には指さしと共に、ごく身近な人やものの身振りサインが身に付き、伝わる喜びを感じられるようになっている。

c 表出できることば

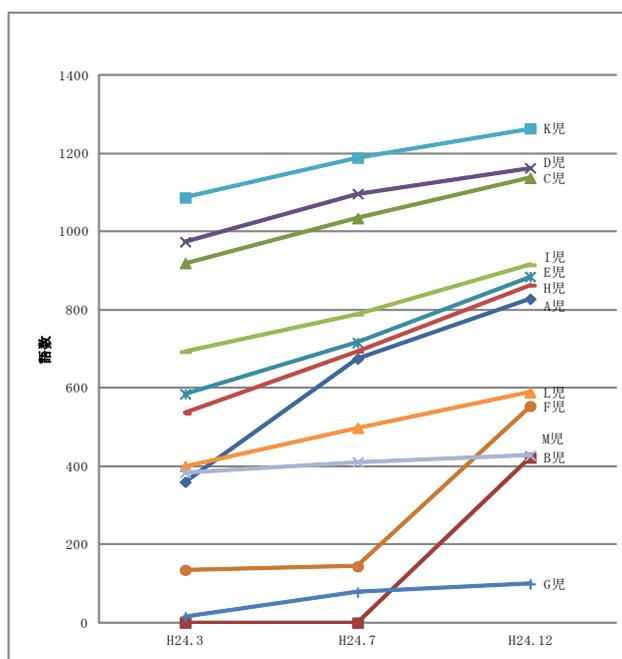
6月は、自発語として表出できることばはなかったが、1月には「ママ」、「バイバイ」、「あお」など数語出てきた。口声模倣が定着しつつあり、音声や口形を意識しながら言えることばも増えてきている。

(イ) 3～5歳児

a 学期ごとの獲得語い数の変化

表5

学期ごとの獲得語い数の変化				
歳		H24.3	H24.7	H24.12
3	A児	360	675	828
	B児	0	0	422
	C児	919	1034	1137
4	D児	974	1097	1163
	E児	585	716	885
	F児	135	144	554
	G児	15	78	99
	H児	536	694	863
	I児	693	789	915
5	J児			
	K児	1087	1189	1264
	L児	400	498	589
	M児	384	411	428



b 獲得語い数の品詞のバランス

表6 (3歳児)

獲得語い数の品詞のバランス

品詞名	全数	H24.3	達成率	H24.12	達成率
名詞	1276	0	0.0%	303	23.7%
動詞	134	0	0.0%	53	39.6%
形容詞	69	0	0.0%	43	62.3%
形容動詞	7	0	0.0%	5	71.4%
副詞	28	0	0.0%	5	17.9%
その他	30	0	0.0%	13	43.3%
合計	1544	0	0.0%	422	27.3%

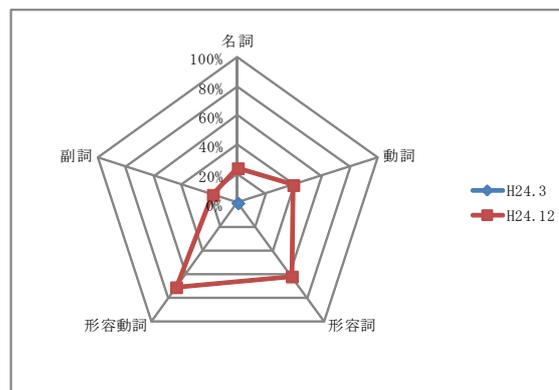
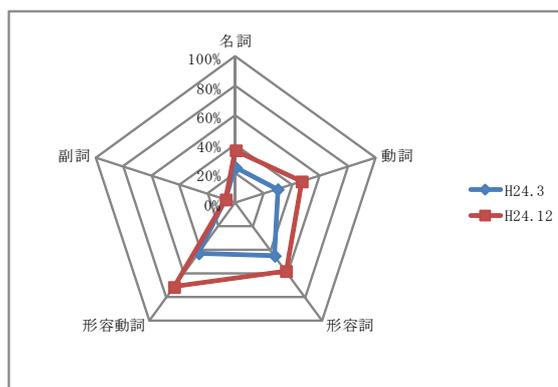


表7 (5歳児)

獲得語い数の品詞のバランス

品詞名	全数	H24.3	達成率	H24.12	達成率
名詞	1276	307	24.1%	457	35.8%
動詞	134	40	29.9%	63	47.0%
形容詞	69	31	44.9%	40	58.0%
形容動詞	7	3	42.9%	5	71.4%
副詞	28	2	7.1%	2	7.1%
その他	30	17	56.7%	22	73.3%
合計	1544	400	25.9%	589	38.1%



ウ 1年目の研究の成果と課題

(ア) ビデオ研究について

成果	<ul style="list-style-type: none"> 具体的な口声模倣の誘い方や子どもの課題のとらえ方などについて、実践的な面でも共通理解を図ることができた。幼稚園を初めて経験する職員も、ビデオを見て学んだ口声模倣の誘い方を、すぐに自分の保育で生かすことができた。 グループ内で異年齢の子どもの様子を見ることで、前言語段階から言語段階における口声模倣の様子を知ることができた。 少人数でグループ研究を行えたことで、1か月に一度はグループ全員の保育を研究することができ、それぞれの保育を検証する回数を確保できた。 口声模倣の観点を設定してビデオを振り返ることで、話題を焦点化でき、細かく保育を検証することができた。 ビデオ研究を積み重ねることで、口声模倣の誘い方を検証するP(計画)D(実践)C(評価)A(改善)のサイクルが機能し、年度初めと終わりを比較すると、子どもの表現レベルの成長が確認できた。教師の口声模倣の誘い方の変容が子どもの表現レベルの成長に重要な役割を果たしていることが検証できた。 口声模倣は子どもの表現レベル向上を図るための有効な手段の一つであることを共通理解することができた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 同じ年齢の子どもの比較をする機会がもてなかった。中間報告会を実施し、他のグループの実践や研究内容について共通理解できると、縦の成長だけでなく、横の広がりや深まりについても研修することができると考える。 口声模倣のより具体的な誘い方について検証するのであれば、個別指導の場面を扱って研究する方が、口声模倣を誘う場面も多く、見やすい。 現在行っている検査の結果を有効に活用できるようにし、「ことばのあゆみ」やその他の資料等を使って、客観的にことばの定着が評価できるような方法を探っていきたい。 研究方法の評価・改善を10月に実施した。もう少し早い段階で行い、新しい研究方法で取り組む時間を確保していきたい。 更に保育に生かすことができる評価ができるように、ビデオ研究の観点の見直しが必要である。0～2歳児では保育の中に含まれる保護者支援について、3～5歳児では複数の観点に当てはまる内容や、観点にない「音数」「音韻」「口形」などをどのように評価し検証するのか、口声模倣に関してより具体的に全体が評価できるような観点にしていきたい。

(イ) 子どもの変容の分析について

成果	<ul style="list-style-type: none"> 「ことばのあゆみ」を基に、年度末での獲得語い数の品詞のバランスを調べたことで、子ども一人一人の実態を確認することができた。
----	---

課題	<ul style="list-style-type: none"> 0～2歳児の前言語段階の子どもの変容を教師や保護者が共有できるチェックリストがないため、評価が主観的になってしまう傾向がある。チェックしやすく、客観的に評価できるリストを作成していきたい。 「ことばのあゆみ」での獲得語い数の品詞の確認を行ったのが年度末だったため、普段の保育に生かすまでに至らなかった。品詞の偏りを意識しながら保育を進めることができるように、学期ごとに確認をしていきたい。 「ことばのあゆみ」に記載している語いの品詞数自体に偏りがあり、個人での獲得語い数の増加などをチェックすることはできるが、客観的なデータとして参考程度にとどめた。今後、それを補うためのチェックシートや検査などを検討する必要がある。
----	---

(ウ) 全体を通して

1年目は「豊かなことばで表現する子どもを育むかかわり方の研究」という研究主題の下、口声模倣に視点を当てて研究を進めた。

この研究に取り組んだことで、子どもの実態に合った口声模倣を誘えるようになり、子どもの表現力にも変容が見られた。豊かなことばで表現できる子どもを育てるために、口声模倣が有効な手段の一つであることが確認できた。

(2) 「絵本の読みきかせ」と「絵日記指導」の場面に視点を当てた2年目の研究

0～2歳児は絵本の読み聞かせ、3～5歳児は絵日記指導の場面を取り上げた。全員が対象児を決め、学期1回ずつの事例を取り上げ、グループで研究した。

ア ビデオ研究

(ア) ビデオで撮影し、グループ研究で検証した。

(イ) 撮影したビデオから子どもと教師の行動や発言を書き起こし、そのやり取りについて考えられる改善点を記入し、ビデオ分析シート(表8)を作成した。

(ウ) 子どもの目標や様子、目標達成のための取り組みや意識したことを記入してビデオ研究記録用紙(表9)を作成した。

(エ) ビデオ分析シート、ビデオ研究記録用紙・ビデオを基に、教師のかかわり方や子どもの変容について分析し、教師の課題や子どもの目標を再設定した。

表8

撮影日	1月 28日	クラス・幼児の氏名	〇〇組 〇〇 〇〇	指導者	〇〇 〇〇
子どもの行動・発言	方向	教師の行動・発言		考えられる改善点	
ア 〇〇 うん よるごはん たべるとよ	→	〇〇君は6時に食べるの？夜ごはん 食べるんだ じゃあ 4時は何で言おうかな？ 夜？4時は夜？			
ゆうがた ゆうがた つくった	→	あへそうだね 夕方の			
おね おね	→	ん？ どっち？			
おひ ゆうがたの 4じにつくった うん	→	ああ そう 夕方作ったんだ えっか えー じゃあ 絵が描いてあるの？		夕方の4時と言えたことを賞賛する まとめて「夕方」にしたことが伝わっていない	
あいであるよ	→	昨日 昨日			

表9

撮影日	6月4日(火) 幼児 〇〇 〇〇	指導者	〇〇 〇〇	1 園目
活動	・前日の避難訓練の絵日記 ・地震は、電気が落ちてくるから怖いという話をした後の会話。			
子どもの様子	・教室を活用し、最小限の身振りでやり取りの内容を理解することができる。 ・思考を伴う質問に答えることができる。	子ども	・髪をさわる。ソワソワして落ち着かない。 ・文章を読んできたこともあり、絵日記に対してはやる気があった。	
目標達成のための取り組み・意識したこと	次の絵日記で意識して取り組むこと			
要因をくむ	・子どもの言おうとしていることを読んで、言葉にする。共感する。	・要因を読みすぎている。 ・要因を強んだ上で、子どもが言いたいことを引き出すような質問投げをしたり、待つたりする。		

イ 報告会の実施

(ア) 12月に中間報告会を行い、事例対象児について報告、学部での共通理解を行った。

(イ) 2月に最終報告会を行った。(表10)

表10

1 子どもの実態と仮説	〇児(〇歳) 聴力:右107dB(25dB) 左90dB(55dB) 聴き取りは良好だが、見え間違いや発音の不明瞭さなどがある。やり取りがつかずなかつたり、深まりにくかつたりする。時系列に沿って意味を理解した説明は苦手。口形をしっかり見せながら、口声模倣を添うことで、正しい文にして言う機会を増やし、発音や記憶にもつなげていく。			
2 指導の内容と経過	(1) 7/13			
教師	振り返り ・こちらの質問に答えさせるやり取りが多い。 ・子どもが描いた絵を利用し、自然なことばを話した。	口声模倣 ・回数が多いが、3文節が多い。 ・チューサインで発音を意識できるようにした。	発音、話し方 ・発音を説明できるが、理解しているか確認する。 ・やり取りと音より質問攻め。	全体を通して ・絵日記に苦手意識があり、2学期から暗記する量を増やした。それにより積極的になり、覚えられた、言えたことに自信が持った。 ・単語カードと口声模倣で構文を整える。
目標	・「八行」「方行」「字行」音を意識して発音する。 ・3～4文節で話す。			
子供	・視線合わせたことについて相手に合わせるように話す。 ・口声模倣が定着し、教師が作った間によって発音を意識して言い直す習慣ができてきた。			
様子	・自分では構文を整えて3文節で話すことが難しい。単語や発音、動詞が抜けることが			

ウ 2年目の研究の成果と課題

(ア) 0～2歳児

<成果>

具体的な指導内容	子どもの様子
絵本を手に持ち、見えるように提示する。	絵本に興味を示すことが多くなった。
繰り返し出てくることばを、音声や身振りで繰り返し見聞きさせる。	音声や身振りを模倣することが増えた。
指差しだけの表出をことばに置き換えて模倣を誘った。	表情や指差し、身振りで伝えることが増えた。

<課題>

- ・ 子どもの指差しや視線などの細かな意図についての検証が必要。
- ・ 集団の場面で口声模倣を誘う回数が少ない。
- ・ 子どもの実態に合った絵本選定が課題になった。
- ・ 保護者支援について（子どもへの適切な量、タイミングでの言葉掛けの仕方など）。

(イ) 3～5歳児

<成果>

具体的な指導内容	子どもの様子
子どもの意図をくんで、口声模倣を誘うことばを組み立てた。	子どもから発言する場面が増えた。
わざと違うことを言って、子どもの話したくなる気持ちを誘った。	
音声や発音の違いを理解できるように、時差模倣を誘った。	発音に変化が見られた。
指文字で助詞を見せて口声模倣を誘った。	助詞を意識して構文を整えて話すことができた。
擬音や擬態語での表出にことばを足し、文を整えて口声模倣を誘った。	助詞を意識した3文節文程度の正語順文が言えるようになってきた。
物事の様子や状態を表すことばを取り入れた。	「どうして」「何で」などの質問に答えられるようになってきた。
理由が分かりやすいもの、説明しやすい内容から扱い、思考を伴える発問を入れた。	「〇〇だから…」と理由を入れた形で答えられるようになった。
子どもの興味がある、実物や動かすことができるものを使った。	落ち着いて取り組むことができ、指差しや身振りで伝えようとする態度が育ってきた。
少しでも言うことができたら賞賛した。	自信をもって発言できた。
構文を整えて口声模倣を誘った。	同じような場面で、覚えた構文を使って話ができるようになった。

<課題>

- ・ 教師の返答の仕方がパターン化している。
- ・ 身振りサインの提示や誘導が多すぎて、口声模倣が少ない。
- ・ 保護者に対して、絵日記に取り組む方法について支援する必要がある。

(ウ) 全体を通して

ビデオ研究に取り組む中で、スモールステップで子どもの実態に応じた課題設定ができ、具体的にどのようなかわり方をすればいいのかが少しずつ見えてきた。それを実践することで、子どもの態度や表現にも変化が見られ、子どもの豊かなことばにつなげるための指導方法の一端が見えてきたところである。

(3) 「絵本の読み聞かせ」と「話し合い活動」の場面に視点を当てた3年目の研究

ア ビデオ研究

(ア) 0～2歳児は絵本の読み聞かせ、3～5歳児は話し合い活動の場面をビデオで撮影し、グループ研究で検証した。

(イ) 撮影したビデオから子どもと教師の行動や発言を書き起こし、そのやり取りについて考えられる改善点を記入し、ビデオ分析シートを作成した。

(ウ) 子どもの目標や様子、目標達成のための取組や意識したことを記入してビデオ研究記録用紙を作成した。

(表 11)

(エ) ビデオ分析シート、ビデオ研究記録用紙、ビデオを基に、教師のかかわり方や子どもの変容について分析し、教師の課題や子どもの目標を再設定した。

(オ) 学期毎に全員1回ずつ事例を提供し、研修した。

イ 0～2歳児の研究

(ア) 絵本の選定

0～2歳児では、インターネットより引用した乳幼児の年齢別絵本リスト（吉田照子）の中から、繰り返しのあるストーリーであること、登場するものが身近なものであること、子どもの変化を追うためにシリーズの中から3作品を選べることを基準に、今回の研究のために右記の絵本を選定した。

クラス	1歳児	2歳児
時期	「ノンタン」シリーズ	「ぞうくんのさんぽ」シリーズ
1学期	「もぐもぐもぐ」	「ぞうくんのさんぽ」
2学期	「いっしょいっしょいっしょとんでいけ〜」	「ぞうくんのあめふりさんぽ」
3学期	「おはねおはね」	「ぞうくんのおはねさんぽ」

(イ) 子どもの様子の観察

絵本の読み聞かせの保育場面をビデオで撮影し、ビデオ研究を行った。

子どもの様子を観察するための共通の視点として「子どもの様子のチェックリスト」（表12）を作成し、「できる」、「少しできる」、「まだ難しい」の3段階で、担当者が学期毎に話し合っってチェックを行うことで、子どもの様子の変化を観察した。

表 12

◎できる、○少しできる、△まだ難しい

		1学期				3学期			
		1歳児		2歳児		1歳児		2歳児	
興味・関心	絵本に目を向ける	○	○	○	◎	◎	◎	○	◎
	絵本に手を伸ばす	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎
	ページをのぞき込む	△	○	△	◎	○	◎	○	◎
	ページをめくる	△	△	○	◎	○	◎	○	◎
表出	読んでほしい本を持ってくる（指差す）	△	△	○	○	◎	◎	◎	◎
	繰り返し読んでほしいがる	△	△	○	△	○	○	○	○
	繰り返し読む	△	△	△	△	○	○	○	○
表出	共感を求めて周りの人を見る	△	△	○	○	○	○	○	◎
	出てきた物を指差す	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎
	ページを見て声を出す	○	○	△	△	◎	○	○	○
	大人の身振りやことばをまねる	○	○	△	○	○	◎	○	○

表 11

ビデオ研究記録用紙 (12月 1日)		(乳幼児グループ)	
撮影日 25.10.21	クラス 1歳児	指導者 OO, OO	2回目
読み聞かせ (場面) のんたんの 「いっしょいっしょいっしょとんでいけ」			
＜指導者の発言、子どもの実態や課題＞			
・前回の本から、「ぞう」へのリアクションを楽しむ様子があり、今回は大人のやりとりが多い。大人から子どもへと伝えたいと思っている。ぞうの顔を指しても、場所を変えて探そうとする様子が見られた。			
・ストーリー的に少し難しいが、日常の中で体験していることがあるので、イメージが持てるようだった。			
・「ぞう」ということも理解している。ステップアップして生活の中で使ってもらいたいと思って取り入れた。日常生活の中でも「ぞうのぞうのぞうのぞう」というと、気持ちを切り替えられるようになった。			
・「ぞうのぞうのぞうのぞう」という場面が繰り返され、おもしろさがあるように感じた。			
・登場人物の表情が豊かで、山手道の賑わいも、表情に目を向け一登場人物として意識している。			
・もう少し、言葉で思ったことを伝えてほしいのと、おもしろい、今後の繰り返しの場面。			
・男の子は場面場面であつてくる様子が見られている。			
	実 況	考えられる手立て	
真部	・子どもからの発言を受け止めようとしている。	・発言を受け止めている。ただし、言葉が離れた子どもに対して、保護者のかわりを伝えていくようにする。（かかわりのまい大人を尊重する）	
	・「ぞう」のリアクションを受け止めようとしている。さらっと流すところがある。	・ストーリー展開や場面の変化を考えた。今後の必要に応じて繰り返し受け止めていくようにしよう。	
表出の様子	・色に触れたところで、一人の子どもの靴下	・他の子からのリアクションもあったので、発言して受け止めてあげても良い（どの大人でも）	
質問・言葉掛け	・色に興味があり口から言葉として取り返す様子も出て、色について触れている。	・横顔に集った子どもをきかせてと、反応しにくい子へも誘いかけるようにする。	
評価	・繰り返しの場面がわかりやすいセリフで、動きを誘いかけようとしている。	・担当の動きをよく見ていて観察をすること	

	出てきた物について伝える (身振り、喃語、擬態・擬声語、様子、名前)	△	△	○	○	◎	◎	○	◎
	次の展開が分かり期待する	△	△	△	△	○	○	△	○
	次の展開が分かり、伝える (身振り、喃語、擬態・擬声語、様子、名前)	△	△	△	△	○	○	△	○
	教師側の働き掛けに応じる。	△	△	△	△	○	○	○	○
態	集中して見る。	△	△	△	△	◎	◎	○	◎
度	気持ちが絵本に向き続ける	△	△	△	○	◎	◎	△	◎

ウ 3～5歳児の研究

(ア) 教師の発言の分析

年度当初に、千葉聾学校の研究を基に（表 13）、教師の発言（音声行動）の性質やその役割について共通理解を図った。ビデオ研究の際に、教師の発言の性質についてのバランスを見た。その結果、「質問」や「教示」が多いことが分かり、子どもの発言を促す上では、「応答」を増やすことが大事だということを確認できた。

表 13

音声行動に関するカテゴリ		教師の音声行動の役割に関するカテゴリ	
カテゴリ	内容	教師の役割	内容
要 求	呼びかけ 相手の注意を促す 提案・誘い 相手に自分の考えを伝え、相手に意見や考えを求め 指示・命令 相手に特定の行動を求める（指示、命令、注意など）	聞き手としての役割	子どもの興味関心や表出意図をくみ取る 共感する 要約をする
質 問	質 問 相手に改善や説明を求める問いかけ	話題の糸口や方向付けの役割	話題の内容を深め、広げる 流れに沿わない気づきや話を受け止める 話を整理する 話題の収束をする
教 示	報 告 自分の考えをありのまま述べる（呈示、報告、主張など） 教 示 相手に新しい知識を伝える	知識の整理の役割	正しい知識を整理する 誤し合いの神立ちをする 伝わり方の確認をする
評 価	評価 相手の行動成果に対する肯定的あるいは否定的な評価	仲介者としての役割	口声模倣・拡声模倣を促す 音韻サインの使用 適切な言葉への置き換えをする
反 復・模 倣	反復・模倣 相手の発言をそのまま真似	日本語の指導	絵本や図鑑などの教材を見示する 絵カードや文字カードを見示する 動作化する 再発音をする 板書する
返 事	返 事 相手の質問に「はい」「いいえ」で応答する	教材教具・視覚的情報の使用	
応 答	受容・承認 「要求」および「報告」カテゴリに対する肯定的応答 否 定 相手の働きかけに対して不賛成あるいは引き受けたくない気持ちを示す 説 明 質問」カテゴリに対する応答		
口声模倣	口声模倣 口声模倣を促す あるいは、教師が示した表層やことばを模倣する		

(イ) 獲得語い数の品詞のバランスのチェック

前年度、「ことばのあゆみ」の改訂を行い、動詞、副詞、形容詞を追加した。前年度3月と12月での獲得語い数をチェックし、品詞のバランスを調べた。（表 14、15）

表 14（3歳児）

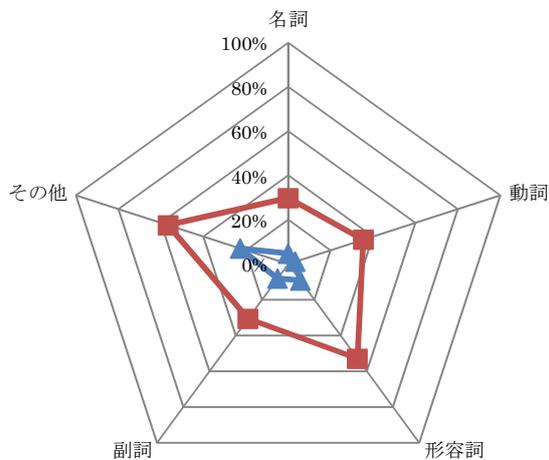
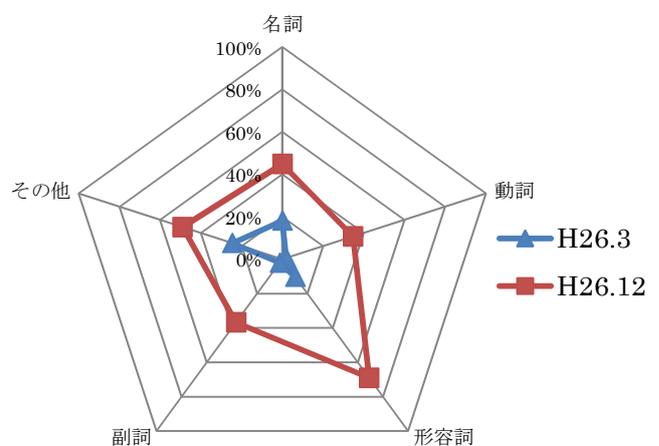


表 15（4歳児）



エ 3年目の研究の成果と課題

(ア) 0～2歳児

<成果>

具体的な指導内容	子どもの様子
半具体物を使って、絵本のイメージ作りをした。	絵本に興味をもち、座れるようになってきた。
抑揚、声のトーン、めくり方、絵本の動かし方などに変化をつけた。	話の展開に興味を示し、「次はどうなるのだろう」と期待して見るようになってきた。 身体表現が減り、絵本に集中して見入るようになった。
子どものその日の様子に合わせ、繰り返したり、テンポを変えたりした。	繰り返して出てくるものが分かり、自ら表出してくるようになった。
日ごろの保育での遊びに取り入れられるような内容の絵本を選び、遊びにつなげていくよう意識するようになった。	生活の中で「もぐもぐ」、「いたい、いたいのとんでいけ」などの言葉を使うようになった。

<課題>

- ・ ペア、母親など、大人の働き掛ける雰囲気作りを大切にして、子ども同士の働き掛けを促していくようにしたい。
- ・ 子ども同士のかかわり合いが出てきているので、更に促し広げていきたい。
- ・ 母親を、もう少し巻き込むような働き掛けをする必要がある。
- ・ 教師が母親にモデルを示したり、表現豊かなリアクションをしたりし、保護者が子どもに対してよりよい支援ができるように促していく必要がある。

(イ) 3～5歳児

<成果>

目標達成のための取組・意識したこと	子どもの様子
子どもの言いたいことを丁寧に言語化した。	語い数が増えた。
	子どもからの発言が増えた。
	様々な話題で話ができるようになった。
	分からないことを知りたいという気持ちが育ってきた。
口声模倣を徹底した。	きこうとする姿勢が育った。
	助詞を入れて話すようになった。
	同じような場面で、覚えた構文を使って話ができるようになった。 自分で口形、発音を意識できるようになった。
子どもが言ったことを復唱し、子どもからの発言を待った。	子どもからの発言が増えた。
友達の話をきいたり、直接友達に伝えたりするように促した。	友達が話すことに興味をもてるようになった。
	共通の話題で友達と話すことができるようになった。
物事には理由があることを教えるために、「〇〇だから～」の構文を意識して使った。	「〇〇だから～」の構文が使えるようになった。
	「どうして？」の質問に答えられるようになった。
	「なんで？」「どうして？」などを使って、子どもから質問してくるようになった。
会話の中で、形容詞を意識して使った。	形容詞を使って、詳しく説明できるようになった。
	「どんな？」の質問に答えられるようになった。

<課題>

- ・ いろいろな言い回しを意識したいが、次にどんなことばや言い回しを使ったらいいのかが分からない。
- ・ ねらいをどうやって明確にするか。それを、保護者にどう伝えるか。

オ 全体を通して

ビデオ研究を通して、教師それぞれの発言、発問、子どもからの表出の誘い方の特徴を知ることができた。絵本の場面では、内容や登場するものに興味をもったり、集中力が保てたり、子どもからの表出を待ったりするために、子どもの様子を見ながら個々に誘い掛けるなどして数回、内容やことばを繰り返すようにした。話し合い活動においては、教師主導で話し合いが進むことが多かったので、子どもの発言を受け止めたり、反復したりすることを意識した。その結果、子どもからの発言が増え、思考するようになり、話し合いがより深まるようになった。

6 研究のまとめ

3年間の研究を通して、子どもたちが豊かなことばで自分の言いたいことを言えるようになるためには、私たち教師の指導力が大きく影響することを再認識させられた。

1年目の口声模倣に視点を当てた研究で、教師一人一人が意識して口声模倣を誘ったり、言葉掛けをしたりすることで、子どもたちのコミュニケーション意欲や語い数に違いが出ることを確認できた。さらに、2年目、3年目と研究の場を拡大し、教師のかかわりを様々な観点で分析していくことで、これまで見えなかった子どもたちの小さな変化を見逃さない目をもつことができた。

今回の研究で、ことばは、このように指導したらこのように成長する、とすぐに結果として表れるものではないが、教師一人一人の意識のもち方で確実に成長することは確認できた。

今後はかかわるポイントを更に具体的に分析し、子どもたちが豊かなことばで自分の言いたいことを表現し、生き生きと生活することができるよう、努めていきたいと考えている。

小学部の研究

Ⅲ 小学部の研究

1 研究主題

学力の向上を目指した取組

～国語科「書く力」を育てる指導を通して～

2 主題設定の理由

(1) 小学校国語科の目標から

中央教育審議会答申における国語科の改善の基本方針の中で、国語科については、その課題を踏まえ、「実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること等に重点を置いて内容の改善を図る。」ことと示された。

国語科の目標としては以下のことが示されている。

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる。
--

国語（日本語）を適切に表現し正確に理解する能力が、すべての言語活動の基礎・基本となっていて、そこから様々な活動に広がっていると考えられる。

(2) 学校教育目標から

本校では、学校教育目標として「聴覚口話法を基盤に、個に応じたコミュニケーション手段を用いて、言語力、コミュニケーション能力、学力の向上を図り、『生きる力』を身に付けた、心豊かでたくましい人間を育成する」を掲げている。

平成24年度までの研究の反省から、学校全体で「ことば」「学力の定着」が課題であることが挙がっていて、学部や教科における「ことば」「学力」をテーマにすれば、学校教育目標の達成に近づくことができると考えた。

(3) 児童の実態から

児童の実態として、文字や語の誤表記、文や文章レベルでの文法的な誤りなど、表現全般に課題が見られた。また、書くことについても苦手意識を持っている児童が多かった。そこで、「書く力」に焦点を当てて研究を進め、共通理解・実践を行うことで基礎的な内容の定着を図り、書くことに対する苦手意識をなくしていく必要があると考え、本研究に取り組んだ。

3 研究の方法

(1) 研究主題のとらえかた

「学力」の中で、本校の児童にとって特に課題となる、「書く力」に焦点を当てる。基礎的な技能の定着を図り、「書く力」を育てるための手立てについて研究を進めていく。

(2) 研究の目的

- ・ 言葉を使う回数や口声模倣の量を増やし、子どもたちの表現力・思考力につなげることで、「書く力」を高める。
- ・ 言語環境を整理し、語彙を増やすための工夫をして、「書く力」を高める。

(3) 研究組織について（班編成）

平成24年度…理論の研究、実態調査・言語環境の整備、授業を通して

平成25年度…九聴研に向けての取組、語句の提示、実態調査・言語環境の整備、

重複障害学級教育課程編成、授業における指導に当たって

【平成26年度】

ア 授業を通した書く活動への取組

- ・ 研究授業，授業研究の方法検討。授業参観の視点を考える。
- ・ 書く活動の提案（授業の一言感想，ノートの書き方，何かを読んで一言感想 等）

イ 実態調査・言語環境の整備

- ・ アンケート作成などによる情報収集，実態調査
- ・ 詩の暗唱や読書郵便等への取組

ウ 教育課程編成（重複障害学級教育課程編成）

- ・ 書く活動の充実を図るための教育課程見直し

4 研究の経過

(1) 平成24年度の学部研修

ア 理論の研究

- (ア) 「書くこと」の基礎・基本を明確にし，系統性を重視した指導を行うために，国語の指導書から指導内容の「書くこと」に関する事項を拾い上げ，系統性を考えた。系統の分け方については，学習指導要領国語科の目標及び内容を参考とし，四つの系統を定めた。（語句，構成，表記，文字）
- (イ) 拾い上げた指導内容を4つの系統に分類することで，「書くこと」の基礎・基本を押さえつつ，系統性を見ることができるようにした。

イ 実態調査・言語環境の整備

- (ア) アンケートを作成し，実態調査を行った。
- (イ) 言語環境を整えるための取組を考察し，検討・計画した。

ウ 授業を通して

- (ア) 1年生の教科書から課題となりそうな語句を拾い上げ，一覧表にした。
- (イ) 2年生と4年生において，一つの単元を取り上げ，基礎・基本の語句を使って短文作りなどのワークシートを作成し，授業の中で活用できるようにした。

エ 成果

- ・ 教師が書くこと（子どもたちが書けること）の重要性を将来も含めて（を見据えて）再確認できた。
- ・ 国語科に着目し，「書くこと」の基礎・基本を整理できたのがよかった。
- ・ 「書くこと」を意識した実践を行うことで，子どもが言葉をしっかり覚えているかを確認することができた。
- ・ 実態調査で子どもの課題を知ることができた。
- ・ 語句を拾い，ワークシートを作ることで，学年で覚えたい（身に付けさせたい）ワードを共通理解することができた。
- ・ 重要語句を拾ってみることで，「次はこんな言葉が出てくるのか。」と事前に把握でき，授業前後でも意識して子どもに問い掛け（語句の意味の確認等）ができた。

オ 課題

- ・ 「書くこと」や「語句」など一言でくくっても範囲が広すぎるので，目的や方法を共通理解して取り組めたらよい。
- ・ 具体的な語句を確認することで，意識して使えるようにしたい。

- ・ 「書くこと」への意識を高めて、授業に取り組んでいく中で、漢字を書けても読めない、ワークシートの問題はできても、同じことを質問したとき、答えられないなどの課題が見つかった。
- ・ 書く力を付けるために、読むことも大事にできるようにしたい。

(2) 平成25年度の学部研修

重複障害学級在籍児童が増加し、実態に合わせた教育活動が必要となり、学部の研究と並行して教育課程編成を行うこととした。

ア 九聴研に向けての取組（九聴研 第2分科会 自立活動Ⅰ「聴能，補償工学，人工内耳」人工内耳装用児の聴覚活用の意識を高める自立活動～聴き取りを楽しむことを通して～）
自立活動の時間で行った聴覚活用の意識を高めるための実践をまとめて，報告した。

イ 語句の掲示

(ア) 教科書の中から，文を書くときに参考になりそうなものを掲示した。

- ・ 「は」「を」「へ」を使おう
- ・ 様子を表す言葉
- ・ 主語と述語
- ・ 修飾語

(イ) 教科書の巻末に出てくる言葉や書くことに関する内容を取りまとめた。

(ウ) 形容詞や形容動詞をピックアップして，言葉のリストを作った。

ウ 実態調査，言語環境の整備

(ア) 詩の音読への取組

(イ) 読書郵便への取組

(ウ) 実態調査

a 詩に関するアンケート

b 書くことについてのアンケート

c 「えをみておはなしをつくろう」の分析

- ・ 語句の少なさに関して
- ・ 表現力の乏しさ（形容詞，副詞を含めて）
- ・ 想像力の乏しさ（見て分かること以外の記入 例：登場人物の名前，気持ちなど）

エ 重複障害学級教育課程編成

(ア) 小学部における生活単元学習のとらえ方の検討

(イ) 生活単元学習の指導計画作成

(ウ) 重複障害学級の指導体制の検討

(エ) 国語科，算数科のチェックリスト作成

オ 授業における指導に当たって

(ア) 授業の実際

「書く力」を身に付けさせるための指導において，授業研究で柱となる三つの観点（語彙を増やすための工夫，子どもの表現全般，言語環境）を設定し，授業研究を行った。

(イ) 研究授業と授業研究への取組で感じられた成果

- ・ 授業をするに当たって児童に身に付けさせたい語句を教師が事前に把握することができた。
- ・ 教室に語句を掲示したり，日常生活の中でも意識して口声模倣させたりすることがで

きた。

- ・ 生活の中で繰り返し語句を確認することで、児童がその語句を覚えて、自ら確認することができた。

カ 成果

- ・ 詩の音読に取り組んで、声を出しながらスラスラと読めるようになってきた。
- ・ 言葉の表現に関する教師の意識が高まった。
- ・ それぞれの取組がとても参考になった。
- ・ なぜ「書く力」が必要なのか、書く力を育むことを通して、何が成長するかについて学ぶことができた。
- ・ 子どもたちの書く力の伸びがよく見えた。
- ・ 課題が見えてきたことで、今後の指導及び実践の在り方が見えてきた。
- ・ 教師一人一人が「書く力」を意識して支援や指導をするようになっていた。
- ・ 授業の観点を意識することで、それぞれの授業へ還元できるようになった。
- ・ 詩を読んで、イメージを絵にかかせることで、一つ一つの言葉をより明確にとらえ、学習することができた。

キ 課題

- ・ 語句については、教師が意識して見せないと、子どもたちの記憶には残りにくい。
- ・ 助詞の間違が多い。
- ・ ノート指導や作文指導について、学部全体で一貫した指導ができるとよい。
- ・ 段階的な指導について共通理解できるといい。
- ・ 書く力と学力の関連性、書く力を育むために必要なこと等、理論を深められるとよい。
- ・ 個人差とその伸びをどうとらえるか。
- ・ 授業研究でいろいろな人が発言できるように、少人数のグループを作って討議できたらよい。
- ・ 掲示だけでなく、教師や友人など、いろいろな人との会話も意識しながら「言語環境」を作ることができるようにしたい。
- ・ お互いの授業を見合う機会が少ない。

5 研究の実際（平成26年度）

(1) 授業を通した書く活動への取組

ア 書くことの意義について確認

(ア) 国語科「書くこと」の目標

- ・ 第1学年及び第2学年
経験したことや想像したことなどについて、順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身に付けさせるとともに、進んで書こうとする態度を育てる。
- ・ 第3学年及び第4学年
相手や目的に応じ、調べたことなどが伝わるように、段落相互の関係などに注意して文章を書く能力を身に付けさせるとともに、工夫をしながら書こうという態度を育てる。
- ・ 第5学年及び第6学年
目的や意図に応じ、考えたことなどを文章全体の構成の効果を考えて文章に書く能力を身に付けさせるとともに、適切に書こうとする態度を育てる。

(イ)「書く」ことのねらい

- ・ 書くことによって、習得した知識が整理されたり確認されたりする。書く活動には、知識の定着と理解を促すという役割がある。
- ・ 書く際には、論理的な思考力や適切な判断力が求められ、それらの能力が育成される機会になる。書くときには、手順を考えたり、筋道の論理を明確にしたりする必要がある。
- ・ 書くことを通して自己を表現することは、自分の考えや立場を明確にすることになる。また、書くことによって物事や事柄の内容を客観的に見ることができるようになる。
- ・ 書いた内容を周囲と共有することで学びの深まりにつながる。公表して評価してもらうことで、自己有用感を味わわせる機会になる。書いた内容を教材として活用できる。

(ウ)「書く」ための基礎的な技術

- ・ 事実と感想や意見を区別する。
- ・ 目的や意図に応じて書く。
- ・ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして書く。
- ・ たとえなどの比喩を使って書く。
- ・ 句読点の打ち方や段落の書きだし方、会話のかぎ「」の使い方
- ・ つなぎ言葉（接続詞、副詞）の使い方
- ・ 「始め、中、終わり」「起承転結」など、文章の構成の仕方

(エ)「書く活動」の意味

- ・ 文字で示すという意味
→ 「漢字を書く」「筆で文字を書く（書写）」など。その他に、「日記を書く」「手紙を書く」のように、文章を作るといった意味の書く活動がある。
- ・ 書き著すという意味
→ 研究論文や小説などのことを指す。これらの他に、詩、短歌、歌詞、物語、随筆、感想文、意見文、記録文、紀行文、報告文、レポート、論説文など様々な文体（タイプ）のものがある。
- ・ その他の意味
→ 記述する、筆記する、記入する、記録する、記載するなどを指す。まとまった文や文章を書き表す場合には、執筆、著述、著作、起草、寄稿などと言う。また、きれいに書くことを清書する、上手に書くことを達筆、勢いよく書くことを健筆などと言う。
実際の授業では、教科書などの文章や黒板に書かれたことをそのまま書き写す（視写する）活動も行われる。

イ 授業を進める際に行う口声模倣について確認

口声模倣とは、「語や話の長さや、リズムや口形などを意識して、子どもがまねること」。本校小学部では、音声言語を模倣する態度を身に付け、子どもの曖昧な表現や助詞抜け等を正しい表現に誘導する（模倣させる）支援に取り組んでいる。（実態に応じて、指文字や手話なども併用する。）

<気を付けること>

- ・ 学習場面で定着した言葉を、生活場面でも意識的に使うようにして、定着を図る。
- ・ 補助手段（手話、指文字、キューサイン、文字など）を使って口声模倣を誘った場合は、最後にもう一度補助手段を外した状態で、音声のみの口声模倣を求める。
- ・ 様々な模倣の方法（音数模倣、発音模倣、分割模倣、同時模倣、時差模倣、指折り模倣）
本校小学部において、聴覚口話法での指導の補助手段として手話を取り入れるようになってから、10年が過ぎた。コミュニケーションは広がったが、発音への意識が低くなりがちだという意見もある。

児童に学校で声を出すように促すのは、それを見て、きいた教師が発音・構文を正しく訂正するためである。聴覚口話法を基盤として、日本語を教えるということ、常に念頭に置いておきたい。

ウ 授業の中で取り組んだこと（事例）

事例	成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> ワークシート （「何について書くか。」「いつ、どこでしたか。」「だれが、どんなことをしたか。」「誰がどんな話をしたか。」「何がどんな様子でしたか。」「どんなことを思いましたか。」）を基にした日記指導（文作り） 	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートを基に、それをどのように文章にしたらよいかを考えさせると、児童の間違いの傾向を知ることができた。 様子を表す言葉や思ったことを書くようになった。 「先生に～と言われました。」という表現ができるようになった。 ワークシートを読み直しながら書くことで、自分の間違いに気付くことがあった。 	<ul style="list-style-type: none"> 「またしたいです。」「楽しかったです。」で終わることが多いので、それ以外の気持ちの表現について扱っていききたい。（残念だったこと、頑張ったことなど）
<ul style="list-style-type: none"> 日記の訂正をみんなで行う 	<ul style="list-style-type: none"> 文の書き方（句読点や丸、かぎ、日本語の使い方、比喩など）を一緒に学ぶことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 到達度を評価するのが難しい。（評価の視点を全体として明確化する必要がある。）
<ul style="list-style-type: none"> 観察文 	<ul style="list-style-type: none"> 見たこと、きいたこと、さわったことなどの項目をもとに文を書いた。文が思いつかないときは気付いたことを絵に書き込むことで言葉を引き出した。 	
<ul style="list-style-type: none"> 読み聞かせの感想日記 	<ul style="list-style-type: none"> 同じ本を見たりきいたりしても、感想はいろいろで、様々な見方、考え方があったことが分かった。 	
<ul style="list-style-type: none"> 取り上げた言葉（自動詞・他動詞）を使っの文作り 	<ul style="list-style-type: none"> 助詞を付けて短文づくりを繰り返し行うことで、分からなかった言葉も予想して言葉を探すことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の中で少し語彙が増えなくても、使用言語までいかないことが多い。 理解言語あるいはその前の生活言語をもっと増やす必要がある。
<ul style="list-style-type: none"> 単語をイメージする人物をリンクさせる 	<ul style="list-style-type: none"> イメージがぴったりした友達や先生を見付けると、言葉がすぐ覚えられた。 	
<ul style="list-style-type: none"> 1日の振り返りを短文で書く 	<ul style="list-style-type: none"> 助詞の間違いはあるが、少しずつ文章を自分で書こうとするようになった。 	
<ul style="list-style-type: none"> 日記で気持ちを表す言葉を一覧の中から選んで使う 	<ul style="list-style-type: none"> かぎの使い方を覚えた。 生活の中でも表現できるようになった。 	

<ul style="list-style-type: none"> ・ 「もし～だったら」という言葉を用いて、そのときの気持ちや様子を詳しく書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉の使い方や文末表現を意識することができた。文末表現の記入ミスをなくするにつなげた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 気持ちを詳しく説明したり、様子を一部分だけ詳しく書いたりすることは難しかった。事実のみを記入した日記になってしまいがちだった。
<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマ日記 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今までの事実の羅列から、自分が考えたこと、感じたことなどを詳しく書くようになった。 ・ 実態差はあるが、指導しながら話や言葉を広げることができた。楽しみにしている児童もいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 始め、中、終わりを意識していないため、文章のまとまりがない。 ・ いろいろな場面で使うことができるようにしたい。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校への嘆願書（現実のことを書き、希望することやその理由を書く） ・ 本のあらすじ（内容を理解して書く） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 初めに例文を読ませることで、文を書くときの構成する方法を学んでいた。 ・ 表現の方法を学んで、活用できていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主語や述語が整っていない文を書く。 ・ 受身や可能などの表現が十分でない。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 読書感想文 	<ul style="list-style-type: none"> ・ あらすじをまとめられるようになり、「自分だったら」など、立場を変えて書くことができるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ あらすじを書くときに要約ができず、文が長くなってしまふ。（どこが大切なのか分かっていない。）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業で押さえた言葉や新出漢字を使った文作り 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎日の日記に短文作りの欄を設けている。短文作りに抵抗を示さなくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろな場面で新出漢字等を使うこと。 ・ 日々の日記を生活の記録のみにならないようにしたい。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 担任の例から使い方等を学んでからの文作り ・ 連想ゲームで言葉を出させることで文を作る手立てとする 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文を作ったことが自信となり、日常生活でも使うことがあった。 ・ 連想ゲームで出した言葉を使うと、文を作りやすくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉がたくさん出すぎて、どの言葉を使うか困っている様子。（日記等で、場面の精選ができない。） ・ 複数回使っても、必ずしもずっと覚えているわけではなく、時間が経つと忘れることもあった。

<ul style="list-style-type: none"> ・ 同年代の子の投稿を新聞から切り取り、コメントを書くようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろな考えに触れることができた。正しい文を読み、引用することで文章力が付いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文の書き間違いを訂正する時間の確保（自活やちょっとした時間を使って行った。）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 文作り，分からない言葉を選び，教師と保護者の例文を見て本人も文を書いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 例文を読んで意味や言葉の使い方を学習できた。 	

エ 授業研究（ワークショップ型）

（ア） 外部講師による研修

a ワークショップ型授業研究とは

参加者が自ら参加，体験し，グループの相互作用の中で討議したり創作したりする学びの場や創造のスタイル。特徴として，全員の主体的な参加による積極的な検討が期待できる。また，ワークシートへの活動を通して，具体的な解決策まで検討できるというよさがある。

b 具体的な進め方

- 1 参観の視点の共通理解（事前準備）
- 2 付箋紙への記入（簡潔に）
- 3 授業意図の説明（事実，背景を中心に。反省とは違う。）
- 4 グループ検討
- 5 グループ発表
- 6 改善策等の共有化（事後につながる）
- 7 指導助言

鹿児島県総合教育センター 企画課 研究主事

鹿児島県総合教育センター 特別支援教育研修課 研究主事

c 演習

実際の授業をビデオで参観して，「めあての設定の在り方」について，成果，課題，改善策を話し合った。ビデオは県外の小学校での授業の様子。4～5人グループに分かれて話し合い，グループでの話し合いについて発表した。

・ 指導助言

小グループは最大でも6人がいい。今回は4人グループで，視点も一つだったが，話し合いから発表までに23分掛かっていた。まとめるのが難しいので，いかに短く，効率よくするかがポイントとなる。また，次の授業にどうやって生かすかということについても検討したい。ゴールを見据えながらファシリテーター（司会）は会を進行する必要がある。視点を焦点化し，改善策を意識し，次の授業を意識できるようにしたい。

d 成果

- ・ 経験や年齢を超えて，いろいろな立場で授業について意見を出し合うことができた。
- ・ グループ内で共通の課題について話し合うことができた。
- ・ 視点が明確だったので，考えやすかった。

- ・話し合いの跡が残るので、振り返りやすい。
- ・授業研究の方法（流れ）が確認できた。
- ・外部講師による研修は、参考になった。本校小学部は半数が重複障害学級の子どものなので、知的障害教育の視点もできるとよかった。

e 課題

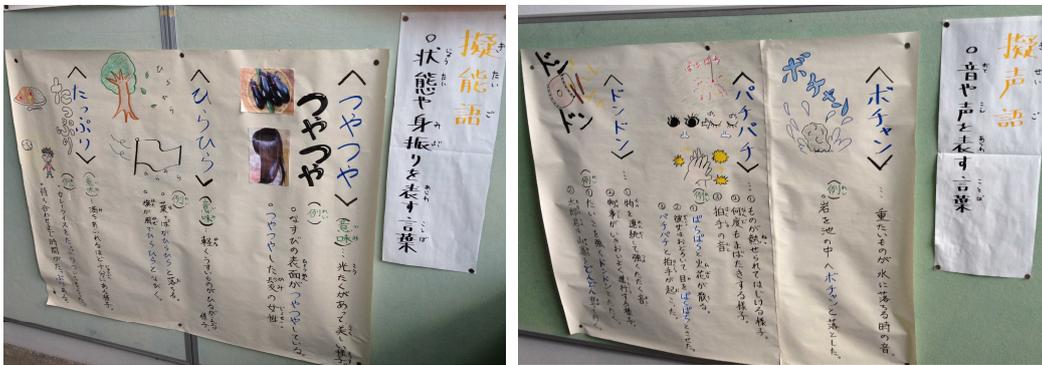
- ・反省を次にどう生かすか。どう子どもに生かしていくか。どうまとめるか。
- ・良かった点をどう広めるか。学部全体で取り組んでいくようなものがあればよいと思う。
- ・出された意見を話し合うための十分な時間を確保すること。視点多いので、一つに絞ってもいいのでは。
- ・繰り返して実施していき、いろいろな人が司会・まとめなど行っていくこと。
- ・授業者にとって、取り組みやすい次の改善策まで出せるようにしたい。

(イ) 観点の見直し

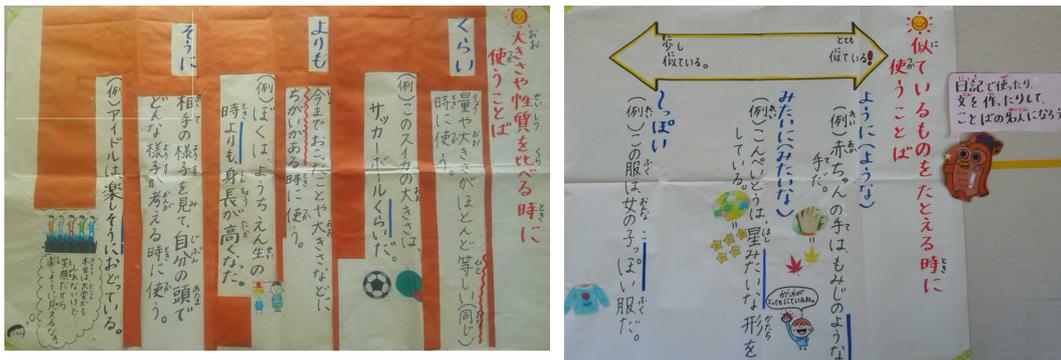
授業研究で「書く力」を身に付けさせるための指導において、柱となる三つの観点（語彙を増やすための工夫、子どもの表現全般、言語環境）を設定していたが、話し合う時間の不足やより深い話し合いを持つことができるように、観点を考え直し、授業研究の視点を「①内容を理解させるための手立ては適切であったか。②言葉を広げながら書かしているか」の、二つに絞った。

オ 資料作成

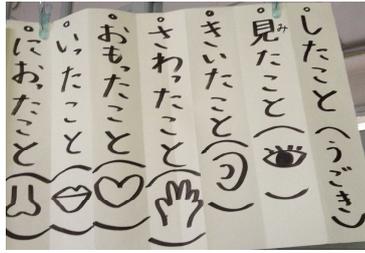
- ・本校小学部の子どもたちにとって課題となっている、擬声語・擬態語について、理解しやすいように絵や写真で表現することで、言葉のイメージができるようにした。また、文中での使い方が分かるように例文を複数示した。



- ・例えたり、比べたりする言葉をいくつか拾い上げ、解説を付けることで日記や文作り等で活用できるようにした。また、同じような使い方でもニュアンスの違いが分かるようにした。



- ・ 言葉をイメージするときに、自分の体験と結び付けて考えることができるように、その言葉についてどのようなことを感じるか、考えるポイントを示した。



- ・ 観察の項目を掲示しておくことで、植物の成長を分かりやすく記録できるようにした。
- ・ 覚えておきたい言葉のルールを掲示し、単元で扱うときにその都度確認しながら取り組んだ。一緒に確認したり、話をしたりする中で、繰り返し触れることで記憶に残るように取り組んだ。
- ・ 新聞記事で、同学年の児童が投稿している文章を集めて掲示したり、それを読みながら感想を考えたりした。



この活動を取り入れることで、正しい文に触れることや、同学年の児童のいろいろな考えに触れることができた。

言葉を引用したり、書き換えたりする活動で語彙が増え、文章の書き方が上達した。



(2) 実態調査・言語環境の整備

ア 研究の概要

児童の変容を見るために、3年間同様の調査を行った。一つは、児童の意識を調査するために「書くことについてのアンケート」を、もう一つは、書く力を調査するために「絵を見て文を作ろう」を行い、分析をした。

昨年度末に実施した「書くことについてのアンケート」の結果から、書くことに関して苦手意識をもっていたり、楽しさを感じていなかったりする児童が初年度より減少したことが分かった。しかし、依然として楽しさを感じていない児童が45%程見られた。そこで、昨年度同様、楽しく言葉のひびきに親しませるために、今年度も詩の暗唱や発表に取り組むことにした。また、宿題や日記以外で文を書く機会が少ないことが分かったので、校内郵便を実施し書く機会を増やした。今年度は手紙のやり取りを通して書く楽しさや伝える楽しさを味わったりすることができるように、読書郵便だけではなく、テーマを基にした往復はがきの校内郵便に取り組むことにした。

イ 研究の実際

(ア) 詩の音読・暗唱

平成24年度の研修で作成した学年ごとの「月の詩」の音読・暗唱に取り組んだ。標準学級は学年に対応した詩を、重複障害学級は児童の実態に応じた詩を家庭や朝の会などで音読・

暗唱をした。それを朝の活動の時間に「詩の音読発表会」を設定し、みんなの前で児童がそれぞれ1回ずつ発表する機会を設け意欲を喚起した(年3回)。

(イ) 校内郵便

往復はがきを用意し、「運動会」や「文化祭」、「読書郵便」のテーマを提供することで意欲的に書く活動に取り組めるよう環境作りを行った。郵便で相手に伝えた内容に関して相手から返信が来ることで、書いて伝わることの喜びを味わえるようにした。また、書く内容のテーマや書き方や文面など、例文を示したり、書く手順を示したりすることで書くことに抵抗なく意欲的に取り組めるようにした。さらに、テーマごとに友達の作品を掲示することで、賞賛する機会を作ったり、他の人がどのように書いているかを知らせたりして、様々な文に触れる機会を増やした。

ウ 成果と課題

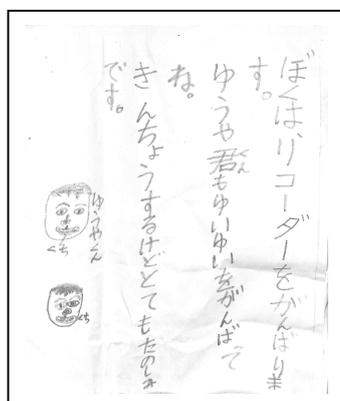
(ア) 詩の音読・暗唱

家庭の協力が得られ、毎日取り組むことができた。手話や身振りを伴って読むことで、言葉をイメージしながら表現することができる児童も出てきた。また、抑揚に気を付けながら読もうとする児童も見られ、言葉のもつリズムやイントネーション、アクセントに興味を持つ児童も出てきた。発表の際には、詩を暗唱するだけでなく、感想を伝え合ったり、友達や教師に賞賛されたりしたことが、意欲につながっていた。しかし、暗唱することはできたが、詩に出てきた言葉を日常生活の中で使うことは難しかったので、教師が会話や学習の中で意識して使うようにしていこうと共通理解した。

(イ) 校内郵便

返事が返ってくることで、書くことへの意欲が増し、「まだ、他の人にも書きたい。」という児童も見られた。郵便を受け取った相手が読むことを意識して書いたり、文章にすることが難しい児童も自分から書きたい内容を教師に伝えたりして積極的に書こうとしていた。間違っていないかの確認を教師に頼む姿も見られた。郵便を書く相手は、友達だけでなく、校長や他学部の先生にも広がっており、賞賛されたり励まされたりして、書いて伝えたり伝わったりする楽しさを味わうことができた。

しかし、書く回数は増え意欲的に取り組んだもののそれぞれの実態に合った表現力を高める活動としては十分とは言えなかった。特に、上学年は相手に応じた言葉や表現を使うことやテーマ内の「本の紹介」「行事参加のメッセージ」など狭い内容に留まってしまった。表現力を高めるために、児童が様々な文章や表現を読んで知り、会話や学習の中で使えるようにしていきたい。友達に伝えるなどの活動をするなど新しい取組を構築したい。



A児、B児ともに、書く量に変化が見られた。A児は、5年時で心理的な描写がなされるようになったことが分かる。B児は、3年時に単語単位で表現していたものが、4年時には日記のようになり、今年度は話を作っている。

全体的に、文法の基本(助詞、句読点、活用)と語彙を豊かにすることが課題として挙げられた。自分の伝えたいことや思ったことを伝えるためにも、語彙は語彙数だけでなく、イメージしたり活用したりできるようにしたい。

b 書くことについてのアンケート集計

【標準学級 H24年度14人, H25年度12人, H26年度11人実施】

【重複障害学級 H25年度10人, H26年度10人実施】

調査項目	選 択 肢	標準			重複		どんなとき・・・ ・標準学級 *重複障害学級
		H24	H25	H26	H25	H26	
(1) 文を書くのは、好きですか。	① とても好き	0	2	2	1	0	① 手紙を書くとき(2) ② ・*手紙を書くとき(2) ・書きたいと思ったとき ・作文を書くとき ・*日記を書くとき(3) ・楽しかったことの感想を書くとき ・いっぱい字を書いたらなんだか楽しいと感じたとき ③ ・日記を書くとき ・作文の用紙を出されたとき *書くのが苦手 *分からないから
	② 好き	5	5	6	2	4	
	③ 好きではない	9	5	2	7	5	
(2) 文を書くのは、楽しいと思いますか。	① とても思う	3	3	3	1	1	① 日記を書くとき ・友だちと短文作りをするとき ・お母さんと一緒に考えるとき ・一生懸命書いているとき ② ・気楽だから ・日記を書くとき ・楽しかったとことを思い出して書いているとき ・先生と話をして書くとき ・丁寧な字で書いたとき *手紙を書くとき *宿題をするとき ③ ・文の続きを考えると *書くのが苦手で楽しくない *知らないことが多いと思ったとき
	② 思う	4	6	5	2	4	
	③ 思わない	7	3	2	7	4	
(3) 文が上手く書けたと思ったことがありますか。	① よくある	2	4	2	1	1	① きれいに書けたとき ・硬筆を書くとき ・*宿題をするとき(2) ② ・漢字を書くとき(2) ・日記を書き終わったとき(3) ・日記のやり直しのとき ・先生から「やり直しがいい」と言われたとき ・文が出来上がったとき *手紙を書くとき
	② たまにある	1	7	8	2	3	
	③ ない	0	1	0	7	5	

(4) 文をよく書きますか。(学校・宿題以外で)	①よく書く	0	3	1	1	1	① FAXを送るとき ・*手紙を書くとき(2) ②・漫画を読んだ後に写すとき ・手紙を書くとき *弟と遊ぶとき
	②ときどき書く	7	4	2	0	2	
	③書かない	6	5	7	9	6	
(5) 文を書くのはむずかしいと感じることがありますか。	①とてもむずかしい	4	0	1	4	3	①・日記を書くとき *いつも ②・文の続きを考えているとき ・間違えるから ・長い文を書くとき ・日記で読点(,)を打つとき ・文が長くなったときに、どこで切ればいいか考えるとき *知らない言葉が多いと思ったとき *考えをまとめて書くことが難しい *漢字を使うとき ③・書くのが好きだから ・スラスラ書けるし、すぐ思い出せるから
	②むずかしい	7	9	5	5	4	
	③むずかしくない	3	3	4	1	2	

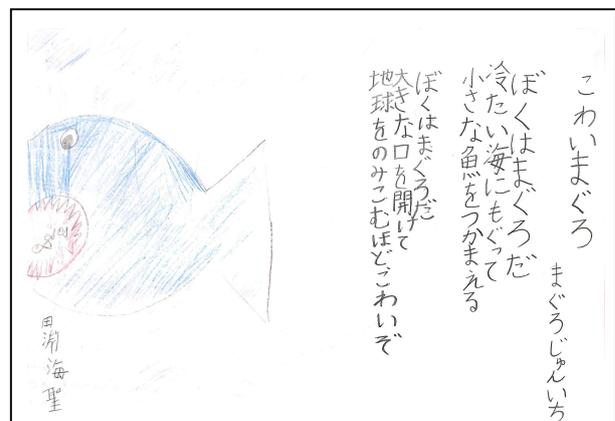
項目(1)の結果から、文を書くのが「とても好き」「好き」と8割の児童が答えるようになったことが分かった。また、(2)ではお母さんや先生、友達など、誰かと一緒に話しながら文を考えるのが楽しいという理由が挙げられており、文を書くことに対して、好きという気持ちや書くことは楽しいという気持ちを持てるようになってきていることが分かる。

(5)から、文を書くことが「とても難しい」と感じている児童は減少傾向にあるが、依然として「難しい」と回答している児童も多い。教師や親と話しながらどんな文を書きたいのかを話したり、書いた文を友達と読み合ったりする機会を設けるなどして、児童が「書きたい」という意欲が持てるような活動を工夫する必要があると考える。また、難しいと考える理由として、文の書き方が分からないと答えている児童が見られるので、段階的に文の書き方(文法等)について指導していく必要があると考える。また、重複障害学級の児童については、文を書く指導の必要性和コミュニケーション指導の必要性的の兼ね合いをその発達段階から考慮して指導の方法を考える必要がある。

このアンケートから3年間の様々な取組は、児童の書くことへの苦手意識を減少させることができたと考える。

c 掲示

児童が楽しんで書くようになったことが掲示からも分かる。教師と話しながら、自分の考えや思いをまとめている。また、それを掲示し、友達や教師に賞賛されたり認められたりすることで、更に書く意欲が高まっていると考える。



(3) 重複障害学級教育課程編成

ア 生活単元学習に関する取組

昨年度、生活単元学習の基本的な考え方や単元設定及び配列の考え方についてまとめ、指導計画を作成した。その際、単元配列の見直しや各単元の活動内容の見直しを行い、単元ごとの目標を設定した。また、語彙力や言語力の指導に生かせるように、単元ごとに身に付けさせたい語句も明記した。今年度は、作成された指導計画に基づき、実施した上で出された反省を踏まえて、単元の目標や内容等について検討・見直しを行った。また、語彙を増やしたり、獲得した言葉を活用したりできるように、書く活動を意図的に取り入れるためにワークシートを作成し、共有化を図ることにした。

(ア) 指導計画の見直し

- ・ 単元の目標や内容等については、実施後、反省や意見を基に修正した。
- ・ 合同学習については、単元の精選や内容の見直しを行った。
- ・ 校外学習については、ねらいを踏まえ、実施時期や内容を再検討した。

(イ) ワークシートの共有化について

- ・ 授業で使用したワークシートをデータで収集し、共有できるようにした。

イ 国語科チェックリスト作成

昨年度、重複障害学級の担任が新年度のアセスメントや個別の指導計画、個別の教育支援計画作成の際の参考資料となるようにチェックリストを作成した。今年度は、より活用できる資料とするために、昨年度作成したチェックリストのうち、「書く」「読む」について重点的に見直しを行った。その際、聴覚障害の特性を考慮して項目の再検討を行った。昨年度に出された意見として、項目数が多いことや評価するに当たっての基準が曖昧であることなどが挙げられていた。そこで、見直しの際には、チェックしやすい項目であることや引継資料として次年度の担当者が活用しやすいものであることを考慮した。（資料1）

(ア) 項目について

- ・ 項目をカテゴリー別にまとめ、カテゴリー内の項目については、段階性を踏まえるようにした。
- ・ 項目数を減らし、内容を大まかなものにした。詳細については、自由記述欄を設けて取り扱った教材や達成された内容、課題となる事項等を記述し、次年度の指導に生かせるようにした。
- ・ 獲得した言葉（資料2，3）や漢字については、書き込む負担を軽減するために、別紙に一覧を作成してチェックできるようにした。
- ・ 語彙のチェックについては、幼稚部の言葉のチェックリストを活用することで、獲得している言葉や学習中の言葉を把握し、指導に生かすことができるようにした。

(イ) チェックの方法について

達成できたか否かでチェックするのではなく、項目の内容について、「ほぼ達成できた◎、あるいは、取り組んでいる（指導中）○」でチェックするようにする。また、取り扱っていないものについては空欄にする。言葉や漢字のチェック表も同様に行う。

資料1 国語習熟度チェック表〈書く〉

国語習熟度チェック表〈書く〉		学 年					備 考		
国語習熟度チェック表〈書く〉		小1	小2	小3	小4	小5	国語科	国語科以外の教科	
か く の 順 じ	1	なぐり書きをする							
	2	意味をかき							
	3	色を塗る							
	4	線(伊達線、直線、曲線)をまねる							
	5	簡単な図形(○△□など)をまねる							
	6	顔のた点を正確に描く							
	7	線(直線、曲線)をまねる							
	8	簡単な図形(○△□など)をまねる							
	9	見たものや経験したことや絵に書く							
文 字	10	片仮名をきかしたり、書き取ったりする							
	11	片仮名をきかしたり、書き取ったりする							
	12	片仮名を書く							
	13	片仮名を書く							
書 き	14	真名、カタカナ、ひらがな、ローマ字を書く							
	15	真名を書く							
	16	片仮名で書く言葉が分かり、書き分ける							
	17	漢字で書く(身近な漢字)							
	18	漢字を書く(1-6年)							
	19	意味がわかって、漢字の読みかきをする							
	20	名前を書く(片仮名、片仮名、漢字)							
	21	ローマ字で書く							
	文	22	主題、話題、接続詞を使って書く						
		23	指示詞、接続詞を使って書く						
24		主語、述語、補語を使って書く							
25		主語、述語、補語、接続詞の順序に注意して書く							
文 章	26	簡単な文章(1行)を書く							
	27	簡単な文章(2行)を書く							
	28	簡単な文章(3行)を書く							
	29	簡単な文章(4行)を書く							
	30	簡単な文章(5行)を書く							
	31	簡単な文章(6行)を書く							

資料2

1-①	みんなのまちに関する言葉 I				【駅、公園、小学校、スーパー、デパート、郵便局、給・保育園、レストラン】			
グループ	言葉	品詞	備考	音声	手話	書字	;	
みんなのまち	いえ	名詞						
	うち	名詞						
	えき	名詞						
	こうえん	名詞						
	コンビニ	名詞						
	しょうがっこう	名詞						
	スーパーマーケット	名詞						
	デパート	名詞						
	保育園	名詞						
	郵便局	名詞						
えき	あそび場	名詞						
	かみ	名詞						
	かみ	動詞						
	かみ	動詞						
	かみ	動詞						
	かみ	動詞						
	かみ	動詞						
	かみ	動詞						
	かみ	動詞						
	かみ	動詞						
こうえん	いば	名詞						
	公園	名詞						
	公園	名詞						
	公園	名詞						
	公園	名詞						
	公園	名詞						
	公園	名詞						
	公園	名詞						
	公園	名詞						
	公園	名詞						
しょうがっこう	えんきょ	名詞						
	しょうがっこう	名詞						
	しょうがっこう	名詞						
	しょうがっこう	名詞						
	しょうがっこう	名詞						
	しょうがっこう	名詞						
	しょうがっこう	名詞						
	しょうがっこう	名詞						
	しょうがっこう	名詞						
	しょうがっこう	名詞						
スーパーマーケット	かみ	名詞						
	かみ	名詞						
	かみ	名詞						
	かみ	名詞						
	かみ	名詞						
	かみ	名詞						
	かみ	名詞						
	かみ	名詞						
	かみ	名詞						
	かみ	名詞						

資料3

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
おわります	はじめる	あきらめる												
おわります	はじめる	あきらめる												
おわります	はじめる	あきらめる												
おわります	はじめる	あきらめる												
おわります	はじめる	あきらめる												
おわります	はじめる	あきらめる												
おわります	はじめる	あきらめる												
おわります	はじめる	あきらめる												
おわります	はじめる	あきらめる												
おわります	はじめる	あきらめる												

ウ 成果と課題

- 生活単元学習について、学習内容や授業形態等について話し合うことにより、職員間で共通理解することができた。
- 作成したワークシートを活用し、児童が書くことで学習内容の確認をしたり、自分の意見をまとめたりすることができた。
- 国語科のチェックリストを作成するに当たって幼稚部の資料を参考にしたり、引き続き活用したりすることで、幼稚部からの一貫した指導が可能になると考える。引き続き「きく」「話す」についても、昨年度作成したものを中心に見直し、作成していきたい。

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ・ 児童の語彙や表現の変化が年度ごとに整理されているので、児童の課題を把握しやすかった。
- ・ 掲示物を通して、児童の語彙が広がった。
- ・ 授業研究の研修をしたことで、活発な授業研究ができていた。
- ・ 書くことを意識することで、職員も児童も書くことを積極的に授業の中に取り入れることができた。
- ・ 情報処理におけるインプットの在り方について考えることができた。
- ・ 言語活動について自分なりに研修を行い、実践することができた。
- ・ 「書く活動」について、それぞれのグループで児童の実態を考慮した内容で研修を行うことができた。

(2) 研究の課題

- ・ 資料提示しているが、もっと全員で共有する場があったら良かった。(例えば、児童集会で毎回言葉の時間を設けるとか・・・)
- ・ 各学年で覚えるべき言葉など、具体的に挙げることができたならよかった。
- ・ 情報をインプットした後のアウトプットの際の手立てについて考えることが今後の課題である。
- ・ 児童の実態を考えたときに、小全体で共通して取り組める研修をどうしたらよいか。
- ・ それぞれのグループでの取組は十分成果のあるものとなっていたと思われるが、それを全体で共有するところまで至らなかったのので、今後全体でどのように取り組んでいくかが課題と思われる。
- ・ 研修資料の活用について、目的をもって読み進めることができたならよかった。

～引用・参考文献～

- ・ 「小学校学習指導要領解説書 国語編」 文部科学省 平成 20 年
- ・ 「小学校学習指導要領解説書 総則編」 文部科学省 平成 20 年
- ・ 坂本多朗 (2009) 「話しことばへの世界への出発」 聴覚障害者教育福祉協会
- ・ 島根県教育センター(2013) 「言語活動の充実 Q&A」
- ・ 宮崎県教育センター(2008) 「国語力を高める『書くこと』の指導の在り方」
- ・ 新沢としひこ・増田修治・青木伸生「ことばのアルバム」 日本標準

中学部の研究

IV 中学部の研究

1 研究主題

「 学力の向上を目指した取組 」
～ 国語力を育てるための取組 ～

2 主題設定の理由

聴覚に障害のある本学部の生徒は、情報処理過程において文字言語情報よりも音声言語情報が少ないことが特徴として挙げられる。

そのため、標準学級では、習得している語い数が少ないことで、文章の読解が困難だったり、接続詞や助詞の使い方を身に付けていないことで、会話や文章で正確に相手に伝えることができなかつたりするなどの課題が見られる。また、重複障害学級では、日常生活の中で具体的経験が不足することが多く、学習の定着に時間が掛かるため、繰り返し学習が必要なこと、問題文の意味が理解できずに適切な解答が困難なことが多いといった課題などが見られる。その中で、進路希望調査の結果は、全員の生徒が本校高等部を始め、県外の聾学校や高校への進学を希望し、今後は全生徒が入試を控えており、将来的にも基本的な知識や適切なコミュニケーション能力を身に付けることが必要だと考える。

そこで、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」といった国語力を育てることで、「聞く力」「話す力」「読む力」「書く力」の向上を図ることができ、さらに、そのことが学力の向上や豊かな教養や価値観、感性等の習得につながると考え、国語力を育てるための取組について研究を行うこととした。

3 研究の内容・方法

- (1) 国語力の実態把握（対象生徒は標準学級4人）
- (2) 国語力を育てるための実践事項の検討，実践及び評価
- (3) 国語力基礎検定に向けた取組，実施，評価

4 研究経過

(1) 日程

ア 平成24年度

月	研修内容
4～5	・今年度の学部研修についての確認
6	・国語力実態把握の方法の検討，決定
7	・実践事項の検討，授業実践
8	・各教科の実践事項の共通理解
9～10	・授業実践
11	・国語力基礎検定受検
12	・国語力基礎検定の結果を基にした個々の目標設定 ・実践事項の見直し
1～2	・実践事項の見直し ・各教科の実践事項の共通理解
3	・今年度のまとめ

イ 平成 25 年度

月	研究内容
4～5	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の取組について ・各教科での個々の目標設定
6	<ul style="list-style-type: none"> ・「国語力を育てるための取組」 ～9歳の壁を越えるためには～ 講師：総合教育センター教育主事 ・効果的な日記，作文指導方法について（国語科）
7～8	<ul style="list-style-type: none"> ・実践事項の確認 ・評価方法の検討
9～10	<ul style="list-style-type: none"> ・同じテーマによる日記指導（日記ボード）
11～12	<ul style="list-style-type: none"> ・国語力基礎検定受検（昨年度と同じ内容） ・実践事項の再検討と実践
1～3	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度のまとめ

ウ 平成 26 年度

月	研修内容
4	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の取組について（提案） ・今年度の取組について（検討）
5～6	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画作成
7	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画評価 ・チェックリスト1学期まとめ
8	<ul style="list-style-type: none"> ・対象生徒2人（聴解力，発表力）の検証 ・チェックリスト再確認
9～10	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画作成
11	<ul style="list-style-type: none"> ・資料収集（朝読書，テーマ日記） ・国語力基礎検定受検
12	<ul style="list-style-type: none"> ・国語力基礎検定結果公表 ・各教科での取組，結果のまとめ ・チェックリスト2学期まとめ
1～3	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度のまとめ

↑

〈朝読書〉〈テーマ日記〉
〈ビデオ撮影〉
〈チェックリスト活用〉

↓

(2) 内容

ア 平成 24 年度

各教科担，担任，寄宿舍，保護者と連携を深めながら取組を実践し，それぞれの取組が実際に国語力の向上につながっているのか，具体的な評価方法の検討を行う。

- ・国語力の実態把握と国語力基礎検定の受検（1回目）
- ・個人目標の設定及び実践事項の検討

※国語力基礎検定・・・「読む力」「書くための力」「聞く力」「話すための力」「総

「総合的国語力」の五つの力に分けて国語の能力を客観的に測る検定。(Z会 国語力研究所主催)

イ 平成 25 年度

外部講師や国語科の協力をもらい、9歳の壁の原因とその問題点や効果的な日記、作文指導方法について研修した。段階に応じた日記や作文の書き方のポイントなどを討議し、取り組むべき内容を挙げる事ができた。

- ・因果関係や共通点、背景を考える習慣
- ・ことばを育む環境作り
- ・読書や口話（聴覚・読唇・発声）の利用と生活言語
- ・語い数を増やす、助詞の使い方
- ・正しい漢字（学年相応のもの）を書く力
- ・修飾語を使った文章が書けるための指導法
友達の文章を参考にできるように掲示したりする。
- ・評価方法の検討

学部内でアンケートを取り、客観的な見方も必要であること、対象生徒以外にも文法の誤りや助詞、接続詞が不適切な点などの問題点が共通している面があることを踏まえ、共通課題（問題点）を整理し、評価方法を検討する。

ウ 平成 26 年度

- ・各教科のチェックリストを作成し、月毎の評価を出す。
- ・朝読書で短い文の読解。具体的な表現や理由を答えられるようにする。
- ・テーマ作文
- ・ビデオ撮影（発表力、聴解力の評価のために授業中の様子を録画する）

5 研究の実際

(1) 国語力の実態把握（1年目の取組）

ア 国語力の実態把握の方法について検討

- ・どのような実態把握の方法が適切か学部で検定についてアンケートを実施した。

<アンケート結果>

「国語力基礎検定」を実施する。

- 誰が見ても分かるような指標として良い。
- 客観的なデータとして良い。

イ 国語力基礎検定受検（図1）

- ・国語力基礎検定を受検することで、客観的なデータとして国語力の実態把握ができるのではないかと考え、実施した。この検定において、「読む力」「書くための力」「聞く力」「話すための力」「総合的国語力」の五つの力の能力とそれらを更に細かく分けた「能力細目別到達度」を測ることができた。それぞれが、国語力の中でもどの力をどの程度身に付けているのか、不十分なのかといったことがデータとして表れ、対象生徒の現時点での国語力の実態を学部全体で把握することができた。

<目標、各教科の取組>

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D
長期目標	・語句力(単語や句の意味が分かる力)の向上を図る。	・語句力(単語や句の意味が分かる力)の向上を図る。	・発表力(公式な場で複数の人を相手に適切に話すことができる力)の向上を図る。	・意欲的聴解力(最後まで聞くことができる力)の向上を図る。
短期目標	・語い数を増やすことができる。	・確実な視写ができる。 ・短文を記憶して書くことができる。	・相手に伝わるように、ゆっくりはっきりと発表することができる。	・よりよい傾聴態度を身に付けることができる。
学級	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日の日記は慣用句を用いて書くようにする。 ・帰りの会では、1分間スピーチを行うようにする。 ・家庭、寄宿舎での取組を設定する。 			
寄宿舎 家庭	・本を読み、保護者から、内容についての質問をし、答える。	・保護者と一緒に、新聞、教科書を音読する。	・寄宿舎での一日の反省を1分間発表する。	・寄宿舎での友達の反省発表を聞き、質問を一つする。
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートを取る際に罫線やマスを意識させたり、一画一画に注意させたりしてバランスの良い字体に気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートを取る際に罫線を意識させたり、一画一画に注意させたりしてバランスの良い字体にするようにする。 ・知らない語句や漢字については自分で調べたり、教わったりして理解語いを増やしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・助詞や5W1Hを意識させることで正しい文を書くことにつなげ、理由を考えさせることで思考が深まるようにする。 ・知らない語句や漢字については自分で調べたり、教わったりして理解語いを増やしていくとともに、小学生程度のドリル学習を通して基礎基本の力を付けさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞く態度を意識させ、指示や発問に対して確実に理解できているかノートや発言を通して確認しながら、授業に取り組ませる。 ・書く目的を意識させ、ノートを取る際の声掛けやチェックを通して訂正させ丁寧に書くようにさせる。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・何を問われているかをつかむために、用語の意味や目的語(助詞)に留意して分かるまで読み返させる。 ・事象の中にある数量を文字式や方程式に表す学習では、文章を読んで数量関係を図に表し、言葉の式を立てた後文字式に変換する練習を繰り返す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・用語の読み書きを、口話と指文字と筆記で確認する。 ・身の回りの事象の中にある課題を解決する学習(文章問題)では、図形の名称や面積の求め方等を確認しながら数量の関係を図と言葉の式で表し、式を立てさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・用語の読み書きを、口話と指文字と筆記で確認する。 ・身のまわりの事象の中にある課題を解決する学習(文章問題)では、数量関係を考える際に、「ちがい」「～ずつ」「分ける」などのよく使われる言い方を図示させながら問題に取り組ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・平面図形と空間図形の学習では、図形の名称や部位の名称等の読み書き方を徹底させる。 ・事象の中にある数量を文字式や方程式に表す学習では、文章を読んで数量関係を図に表し、言葉の式を立てた後文字式に変換するようにさせる。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を読みと写真やイラストなど視覚的教材を利用して、文の内容をより理解できるようにする。 ・分からない言葉は適宜確認しながら授業を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書や板書の内容で分からない言葉はないか、適宜確認することを意識させ、進める。 ・ノートの字が雑な時はもう一度丁寧に書き直させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの地域の特色を資料を読み取って、みんなの前で発表できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近なものやニュースなどと関連付け、話をする。 ・それぞれの地域の特色を理解する中で写真や実物を通して興味をもって取り組ませる。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・実験や観察の内容をノートに文章にし、まとめさせる。 ・表現の方法をいくつか考えて言葉や文章にし、記憶させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験や観察の内容をノートに文章にし、まとめさせる。 ・表現の方法をいくつか考えて言葉や文章にし、記憶させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験や観察の内容をノートに文章にし、まとめさせる。 ・表現の方法をいくつか考えて言葉や文章にし、記憶させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験や観察の内容をノートに文章にし、まとめさせる。 ・表現の方法をいくつか考えて言葉や文章にし、記憶させる。

音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・DVDを鑑賞したり、実際に箏を演奏したりして日本の伝統音楽に親しませる。 ・曲想を感じ取って、速度や強弱の変化を生かした表現を工夫させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・DVDを鑑賞したり、実際に箏を演奏したりして日本の伝統音楽に親しませる。 ・曲想を感じ取って、速度や強弱の変化を生かした表現を工夫させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・曲想を感じ取って、速度や強弱の変化を生かした表現を工夫させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・DVDを鑑賞したり、実際に箏を演奏したりして日本の伝統音楽に親しませる。 ・アジア各地の音楽に触れ、音楽や音色の特徴を感じ取らせる。
保体	<ul style="list-style-type: none"> ・板書や紙面において視覚的に用語の確認を行うようにする。 ・曖昧な言葉や新しい用語はその都度確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・板書や紙面において視覚的に用語の確認を行う。 ・書く作業や声に出して言う活動を多く取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶や発表時には、「ゆっくりはっきり」を徹底する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人の話を聞く時の態度(姿勢、目線)を徹底する。
技術・家庭	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な語句や言葉の意味について、日常生活の中で確認したり、小テストをして定着度の確認をしたりする。 ・漢字の読みや意味を辞書を使って調べる時間を多く設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な語句や言葉の意味について、日常生活の中で確認したり、小テストをして定着度の確認をしたりする。 ・作り方や手順等を書く時間を多く設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な語句や言葉の意味について、日常生活の中で確認したり、小テストをして定着度の確認をしたりする。 ・日常生活に関する事柄について、自分の考えをまとめて発表する時間を多く設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な語句や言葉の意味について、日常生活の中で確認したり、小テストをして定着度の確認をしたりする。 ・友達の意見を聞く機会を多く設け、内容を理解できているか確認する。
外国語	<ul style="list-style-type: none"> ・聞くことに集中できるようにする。 ・単語の意味を覚えて日本語訳ができるようにする。 ・授業のノートを丁寧にまとめ、宿題では何度も書いて覚えるようにする。やり直しも行う。 ・ワーク問題で、問われている問題の意味を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞くことに集中できるようにする。 ・発音に気を付けて英語がスムーズに読めるようにする。 ・授業のノートを丁寧にまとめ、間違えた英語は訂正をさせる。 ・宿題では何度も書いて覚え、書き間違いをなくすようにする。 ・ワーク問題で、問われている問題の意味を理解し、英単語や英文が書けるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・姿勢良く、最後まで集中して授業を受けるようにする。 ・授業のノートは丁寧にまとめ、宿題では何度も書いて覚えるようにする。書き間違いをなくすようにする。 ・ワーク問題で、問われている問題の意味を理解し、英単語や英文が書けるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・姿勢良く授業を受け、話を最後まで聞くようにする。 ・単語の意味を覚えて、日本語訳ができるようにする。 ・授業のノートを丁寧にまとめ、宿題では何度も書いて覚えるようにする。 ・ワーク問題で、問われている問題の意味を理解し、英単語や英文が書けるようにする。

(2) 国語力を高めるための実践事項の検討、実践及び評価 (2年目の取組)

ア 国語力・言語力の到達度評価シート

- ・ 昨年度に引き続き、各教科で個別の指導計画の目標を具体的に明記し、教科学習の中で取り組んだ結果を到達度評価シートで1年前のものと比較する。

○ 到達度の総合評価

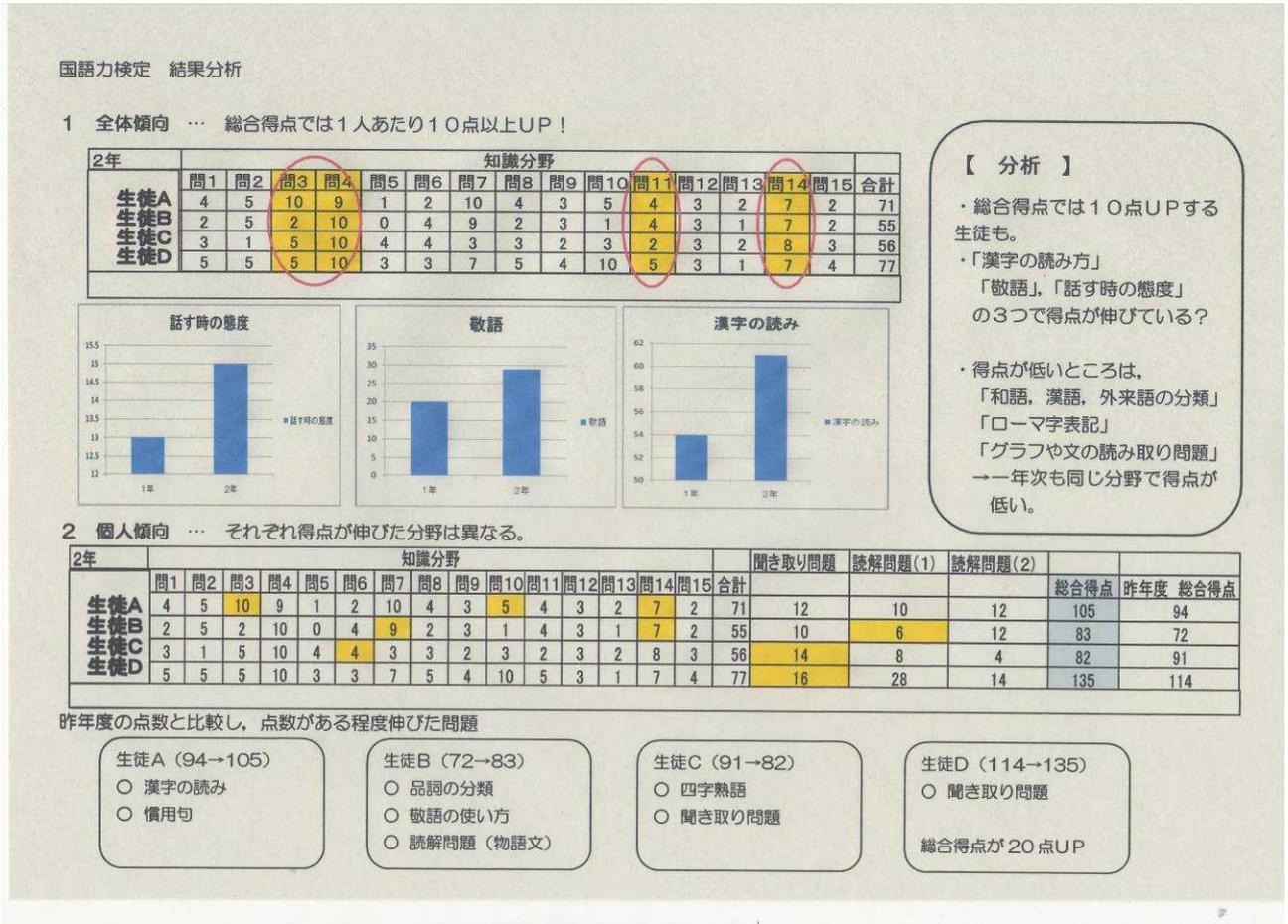
	生徒 A	生徒 B	生徒 C	生徒 D
聞くこと	小1→小4	小1→小3	小1→小2	小1→小3
話すこと	小1→小5	小3→小5	小1→小2	小5→小6
読むこと	小2→小4	小2→小3	小2→小2	小4→小4
書くこと	小2→小5	小2→小2	小2→小3	小3→小5
読字力検定試験	8級→7級	8級→7級	8級→7級	8級→6級

イ 昨年4月から定期的に行った昔話や日記、作文を書いたり発表したりして比較する。

- ・ 学習指導法の係と連携し、朝自習や自宅学習で読書が取り入れやすいように読書カードを作成し、日記指導では毎週末に同じテーマを設け書くこ

ととし、生徒と教師と一緒に添削を行い、間違った表現に気付かせたり、正しい文章表現を参考にさせたりする。

ウ 昨年と同じ内容の国語力基礎検定を受けて結果を比較する。(資料2)



・ 昨年度と同様の国語力基礎検定を受けての評価

生徒A	生徒B	生徒C	生徒D
4月当初は一文が長くなるがあったが、文の間に接続詞を入れたり、要点をまとめて文章にしようとしたりする様子が見られるようになった。まだ、書き言葉と話し言葉が一緒になったり、接続詞を正しく使えていなかったりすることがあるため、今後も指導が必要。	実際に自分が体験したことは積極的に文章で表現できるようになってきた。2月の作文では、何がおもしろかったのかということ具体的に書こうとする様子も見られた。本人の頭の中にあることを文章として表現させるために、今後も日記や作文等の経験を積ませて文章の作り方や語い力の向上などを図る指導が必要。	発表に対して意欲的に取り組もうとする様子が見られたが、内容をまとめ、相手に分かりやすく伝えることは今後も練習が必要。伝えるための豊かな語い力を身に付けさせるために日記や作文での指導が必要。	1年の時と比べると話を聞こうとする様子が多くなってきている。しかし、教師や他の生徒が話している途中で発言したり、説明を最後まで集中して聞かず、勘違いをしたりすることも多い。相手の説明を最後まで聞く態度の育成や、内容をしっかり理解するための語い力を身に付ける必要がある。

(3) 国語力基礎検定の受検と総合評価(3年目の取組)

ア 教科別チェックリスト

- ・ 4人それぞれの課題に向けて手立てや工夫を具体的にしようという観点から各教科の個別の指導計画に取組を明記し、さらに各教科で実践事項について評価を行った。

「名ゼリフカルタを作ろう」・・・

お気に入りのマンガや本からセリフを元に心に
残る言葉をピックアップし掲示する活動。生徒
だけではなく教師も参加し、様々なジャンルの
本を紹介し合う。

ら	相	さん	た	し	る	た	私
ない	川	勉	話	の	と	く	が
時に	ユ	強	少	こ	思	さん	エ
自分	リ	を	女	の	た	の	リ
で	ア	を	で	本	か	い	ト
考	が	す	高	は	ら	言	ジ
え	オ	す	校	相	か	葉	ャ
す	メ	る	一	川	ら	が	ッ
に	カ	天	年	ユ	う	あ	ク
友	高	才	生	リ	超	っ	を
達	校	だ	な	ア	天	て	選
の	を	け	の	と	才	、	ん
答	変	の	に	い	の	少	だ
え	え	学	生	う	し	し	理
そ	ま	校	徒	超	勉	勉	由
	し	を	会	天	強	強	は
	た	変	長	才	に	に	
	な	え	に	の	な	な	
	り	ま	な	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	
	り	り	に	に	な	な	
	し	し	に	に	な	な	
	た	た	に	に	な	な	
	な	な	に	に	な	な	</

やせるようにするという観点から面白作文や意見文、四字熟語作文、もしも作文、説明文など時期や学習の進捗状況に合わせたテーマを設け、週末に作文を書き、学部集会での発表、生徒同士、教師の添削、掲示という流れで中学部の生徒全員で取り組んだ。

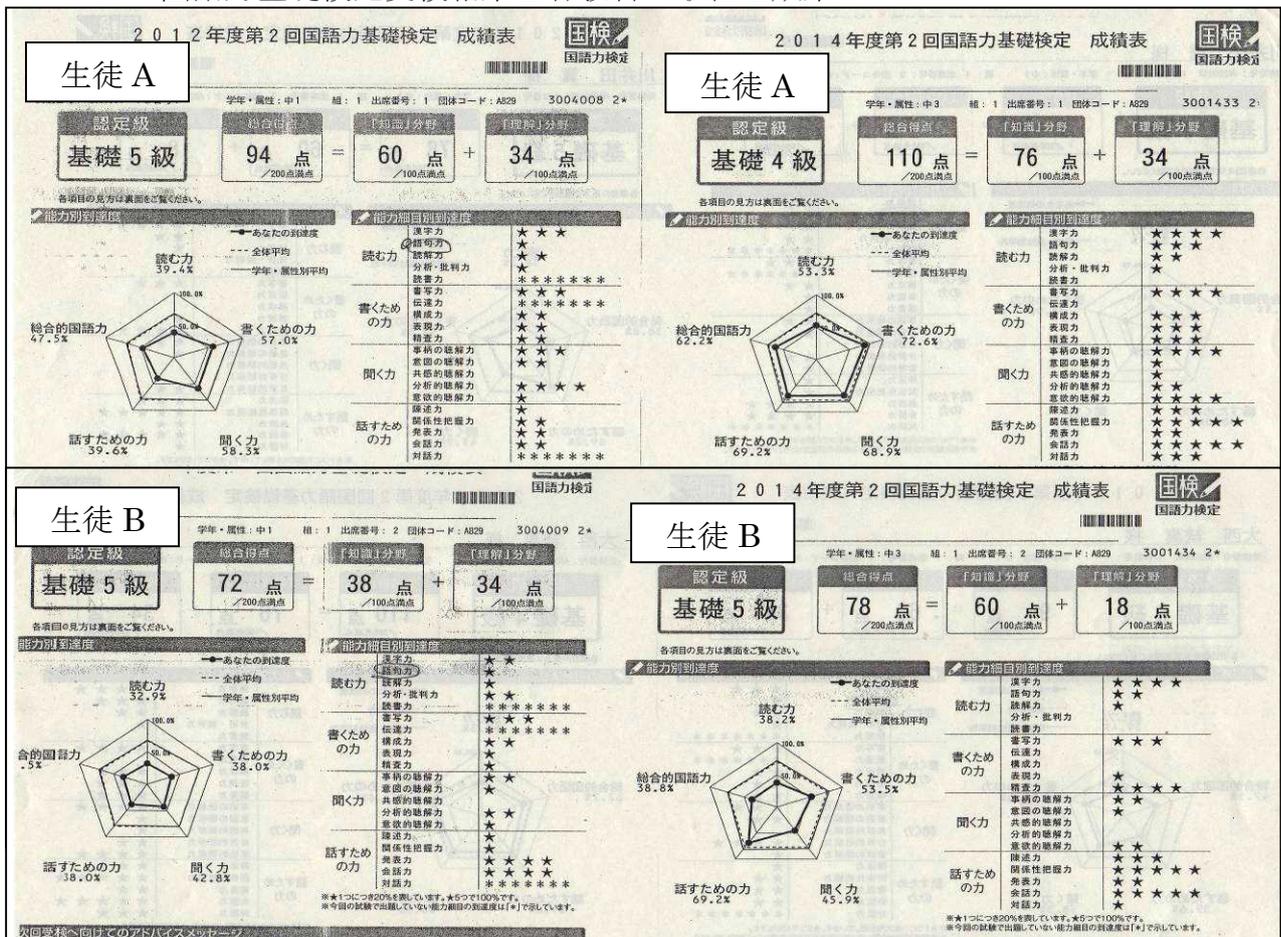
2年生のテーマ作文

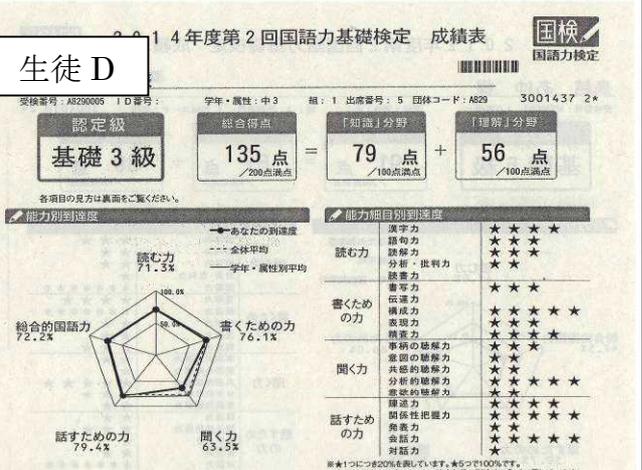
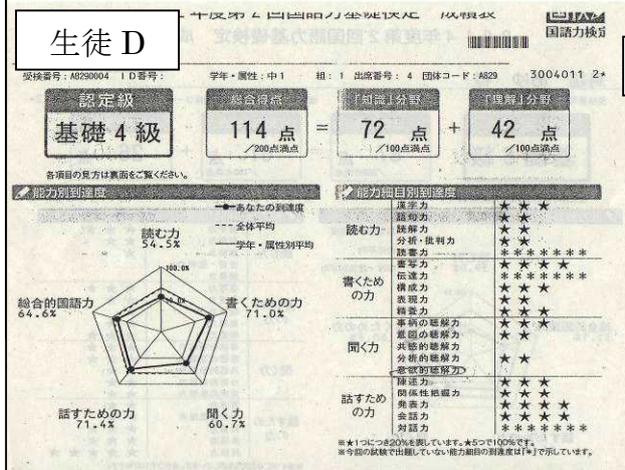
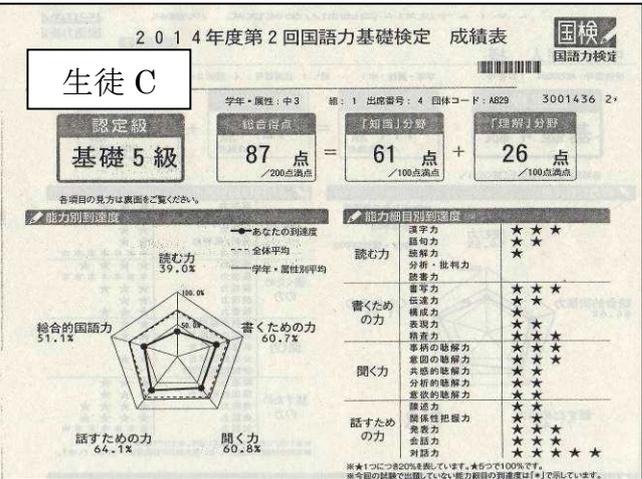
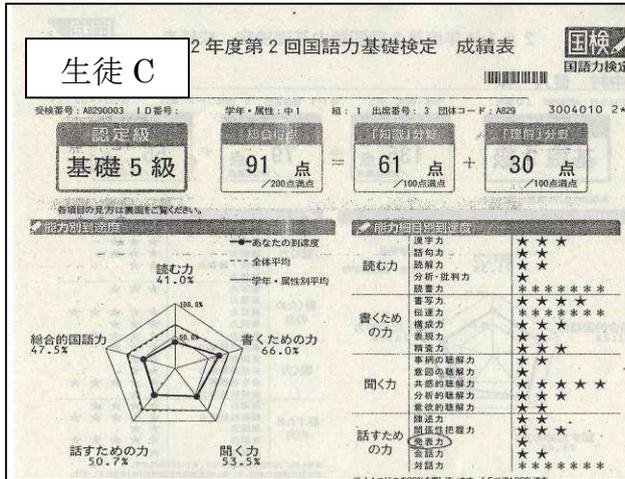


オ 生徒C・Dについての評価

・二人の生徒については聴解力、発表力について客観的な評価が必要である、ということから、授業中の発表の様子や人との会話をDVDに録画し二人の変容と今後の課題について話し合った。授業中の姿勢が悪くなったり、集中力がなかったりという実態があり、授業の中で「話す」「聞く」「書く」の活動の時にはそれぞれを目で見て判断できるようにそれぞれのシートを黒板に掲示するように共通理解を図った。

カ 国語力基礎検定受検結果と各教科の取組と成果





6 研究の成果と今後の課題 (次年度へ向けて)

<国語力・言語力の到達度評価シートの変化>

	生徒 A			生徒 B			生徒 C			生徒 D		
	1年	2年	3年									
聞くこと	小1	→小4	→小5	小1	→小3	→小4	小1	→小2	→小6	小1	→小3	→中1
話すこと	小1	→小5	→小6	小3	→小5	→小6	小1	→小2	→中1	小5	→小6	→中1
読むこと	小2	→小4	→小4	小2	→小3	→小4	小2	→小2	→中1	小4	→小4	→中2
書くこと	小2	→小5	→小3	小2	→小2	→小3	小2	→小3	→小4	小3	→小5	→中1
読字力検定	8級	→7級	→6級	8級	→7級	→6級	8級	→7級	→6級	8級	→6級	→5級

< 3年目の学級、家庭、教科指導での成果○と課題△>

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D
学級	○語い数が増えてきている。話を聞いているように見えて、聞いていないことがあったが、話し手の方を向いて聞こうとする態度が見えるようになってきた。 △漢字を読むことはできるが、意味についての理解が曖昧なことが多い。	○語い数が増え、言葉で何かを伝えようとするが増えた。日記や作文にも感想や自分の気持ちを書こうとするようになった。 △聞き間違いや思い込みで語いが不正確になることがある。使用した言葉をその場で確認する作業が必要。	○相手の話や友達同士の話し合いで最後まで聞くように学級で取り組むようになってから、挨拶や相手を注視し、最後まで聞いてから発言することが増えるようになってきた。 △気分がのらないと集中力に欠け、最後まで話を聞けないことがある。	○落ち着かないときもあるが、最後まで話を聞こうとする態度が見られるようになってきた。 △思い込みで相手の話を間違えて理解したり、会話がかみ合わなかったりすることがある。
家庭・寄宿舎	○ぎこちなかった読み方が、スムーズに読めるようになってきた。音読では文字を読んでいただけだったが、内容を気にしながら読むようになった。 △本を楽しんで読めるようになってほしいが、まだそこまでにはなっていない。	○親子で一緒に取り組むことはあまりできなかったが、分からない問題などがあると聞いてきて一緒に問題を解くこともあった。 △年齢にあった学力には追いついていない。コミュニケーションでは分からないままで返事をする事ができる。	○人前で話をすることに抵抗はなく、落ち着いて発表できるようになった。毎日の1分間スピーチでは、状況や感情を短くまとめて発表できるようになった。 △日常使うような言葉の漢字が読めないことがある。事前に文章を準備すると、読み上げることに集中してしまう。	○1年の時から比べると人の話を最後まで聞くという態度は、身に付いてきた。 △人に伝えるということ意識し、発音や内容の把握、言葉の使い方に気を付ける。重要なことの優先順位を考える力が必要。
国語	○書字については丁寧に書けるが、指示がないと雑になりがちだったので意識して声掛けした。語い力、漢字力については付いてきている。 △構文力がまだ身に付いていない。自力で意味の分かるような文章構成をすることができない。	○知らない語句については少し自覚が出て、辞書を活用する機会が増えてきた。 △書字についてはなかなか改善できず、注意を促すとそのときは直すが、記憶が持続できない面があり、継続的な指導が今後必要。問いの文の理解が難しくじっくり読まずに解いてしまう。文章構成をすることが困難。	○文章作成については助詞等の誤りはあるものの、ある程度意味の通る文を構成できる。簡単な表現で気持ちなどを表すこともあった。 ○知らない漢字や語句について調べることはできてきたが、習慣化までには至っていない。語い量をもっと増やす。書くことがなかなか記憶につながっていかない。	○聞く態度については意識しつつあり、視線を感じて注視することはできてきた。聞いていて分からないときなど、自分から質問することがあった。 △慌てるが多く早とちりにつながりやすい。注意散漫になりやすく、集中力が途切れる傾向にある。
数学	○何を問われているか書かれた部分(2~3文節)を読み取れることが増えた。 △理解しているが、教師や友達に説明する時には滞ることがある。	○隣どうしの数字やアルファベットを繋げたり、重ねて書いたりすることが減った。 △意味を捉えようとせず、解く方法のみを覚えようとする傾向がある。	○理解でき、自信を持った単元では、誤った時に質問することが増えた。 △演習によってある程度定着するまでは集中を持続することが難しい。	○体言止めでは表せなかったが、言葉の式を立てられることが増えた。 △話を聞いている途中で、自分の考えを言い始めることがある。
社会	○論述形式の質問をすると、自分の持っている言葉で最後まで伝えようとする態度が出てきた。漢字の読み方の間違いも減ってきた。 △自分の言葉で伝えようとするのが苦手な様子が見られる。	○板書の際に、ノートに書く字を丁寧に書くように意識している様子が多く見られるようになった。予習に取組、教科書の分からない言葉を自分で調べてノートに書くことができた。 △自分の意見を文章で発表しようとするのが苦手。問題の意図を汲み取って正確な答えを探すのが苦手。	○資料を見て思ったことを積極的に発表しようとする様子が見られた。また、相手が分かるように文章を考えて発表しようとする様子も見られた。 △相手に伝わるように文章を考えようとする様子はあるが、発表内容があいまいで文章作りが苦手。	○ニュースの内容への興味関心が高く、教師の説明を意欲的に聞こうとし、分からないことは積極的に質問しようとする姿が見られるようになった。 △発表することに対し積極的であるものの、相手が話している途中でも自分の意見を言おうすることが多い。

理科	○ワークシートを用いて、文章を穴埋め式にすることで、自分で考えて文言を書くことができた。まとめも、簡単に自分で書くことができた。 △実験の理由や結果を文章で説明する事ができない。一つ一つ促すと書くことができる。手立てが必要。	○学習のまとめを詳しくノートにまとめている。重要語句は理解ができているが、問題文から関連付けて解答することが難しい。単文は覚えることができた。 △重要語句や文章を丸暗記するのではなく、説明する事ができるような問いかけ、手立てが必要。	○ワークシートを用いて、文章を穴埋め式にすることで、自分で考えて文言を書くことができた。色を使い自分なりに文をまとめることができた。 △重要語句や文章を丸暗記するのではなく、説明する事ができるような問いかけ、手立てが必要。	○ワークシートを用いて、文章を穴埋め式にすることで、自分で考えて文言を書くことができた。まとめも、簡単に自分で書くことができた。 △実験の理由や結果を文章で説明する事ができない。一つ一つ促すと書くことができる。手立てが必要。
音楽	○鑑賞後の感想発表では自分なりの言葉で文章にして発表することができるようになった。 △使用する言葉が簡単な物や助詞の間違いが時々見られる。	○手話を使った歌唱の学習では歌詞で使われた言葉は意味を含めて覚えることができた。 △歌詞の内容から作者の思いを想像したり情景をイメージしたりすることが苦手。	○様々な曲を鑑賞しその感想を相手に伝えるように発表することができるようになった。 △気持ちを表現する言葉や文章表現が不正確になってしまうことがある。	○友達の発表や曲を鑑賞する際に注目させ聞いたことを質問すると正確に答えられるようになった。 △興味を持たない内容は、落ち着きが無く、注目できない時がある。
保健	○用語の確認を繰り返し押さえることで、学習した言葉のある程度定着することができた。 △細かい言葉の間違いがある。その都度、見逃さずに確認が必要。	○同じ語句を繰り返し押さえることで、学習した言葉を覚えることができた。 △日常的に使わない言葉は、時間の経過と共に忘れてしまうので、覚えた言葉をできるだけ使う場面を設定していく。	○相手に伝わるようにゆっくりはっきり話そうと意識することができるようになった。 △発表する時の適切な態度を身に付けていきたい。	○話し手を注目して聞くことができるようになった。 △気持ちが急ぐ時には、最後まで聞かずに行動することがある。
技術	○授業の最初に言葉の意味を確認すると、理解できている語句が増えてきた。 △説明すると「わかった」と返事しても間違っていて理解していることがあるため、再度確認が必要。	○全員が作業に取り組んでいるときに、本人の理解できる言葉に変えながら説明し、大半理解できるようになった。 △説明する時間を確保するため個別対応が必要。	○興味がわくように発問を工夫し、発表することが増えてきた。授業に興味を持っているときは積極的に発表し、相手に分かるように意識することも増えてきた。 △気分によって授業態度が変化することがある。	○話を最後まで聞くことを意識している態度が見られるようになった。 △手を挙げずにすぐに発表をしようとするが、発問の内容を確認しないで答え、間違っていた。
家庭	○毎回の授業の中で分からない語句の意味調べに取り組ませたことで、調べた語句を使おうとする様子が見られるようになった。 △生活経験が乏しく、生活に関する語いが少ない。生活と関連付けた学習が必要。	○辞書をひくことに慣れ、調べた語句を使おうとする様子が見られるようになった。 △時間がたつと、調べた語句を忘れることが多いため、定着が難しい。同じ語句の確認を繰り返し取り組み、定着を図る必要。	○自分の考えをまとめて書かせ、発表する活動を多く設定し、相手に伝えるように発表の仕方を考える場面が見られるようになった。 △様々な表現の方法を身に付けるためにも話し力の向上が必要。	○「書く・聞く・話す」のメリハリをつけるよう促すことで、友達の話を集中して聞く場面が増えてきた。 △興味のある話題になると、友達の発表場面でも、急に話し始めたりすることがあるため、継続した指導が必要。
外国語	○集中して聞くことができた。ノートも丁寧にまとめ、単語をよく覚えた。ワーク問題の意味を理解し、問題を解答することができる。	○話す人を見て、話を聞くことができた。 △日本語で苦手な発音(シャ、シュ、ヨ)は英語でも苦手であった。綴り間違いがよくあった。ワーク問題は、問題の意味は理解したが、文法や単語を組み合わせて文を作ることが難しかった。	○姿勢良く授業を受けることができた。ノートは丁寧にまとめた。英語の書き間違いは少なくなった。 △集中力に欠けた。問われている問題の意味が理解できなかった。文法や単語を覚えていても、組み合わせた答えを考え出すことができなかった。	○姿勢良く授業を受けた。単語をよく覚え、上手な日本語訳ができた。ワーク問題の意味を理解し、単語や文を書くことができた。 △最後まで話しを聞くには、声掛けが必要。

＜研究のまとめ。

4人の生徒を対象に担任、教科担当だけでなく、保護者や寄宿舎など連携を図りながら取り組んできた。4人の具体的な実践事項を個別の指導計画の目標に明記し、その評価も毎月行うことで、課題となっていた「語句力」「発表力」「意欲的聴解力」について授業の中でもより具体的な指導へつなげることができた。また、対象生徒4人に限らず、中学部全体で朝読書やテーマ作文など五感を働かせて書く楽しさを体験するという新しい取組を継続したことで、読書への興味を広げ、さらに五感を働かせて書くと自分の思いを豊かに表現できることに気付き、『書きたいな!』という意欲を持つことができた。休み時間には生徒同士でお互いの作文を読み、間違いを指摘し合ったり感想を言い合ったり、文章を書くときには基本的な決まりに気を付けて書くようになっていたりする姿が見られるようになり学習意欲を向上させることへもつながった。このような取組から、対象生徒4人の国語力基礎検定の結果を3年かけて向上させることができたのではないかと考える。

しかし、国語力・言語力の到達度評価シートの変化では生徒C、Dについては中学生のレベルまで到達しているが、生徒Aは『話すこと』の到達度はこの1年間で変化がなく『書くこと』では低くなっている。国語力基礎検定では、認定級や総合得点が上がったものの、生徒Aは分析・批判力については伸びが見られないことや生徒Cについては書くための力が低下しているなど総合的に見ると中学3年生のレベルには達していない。また、『3年目の学級、家庭、教科指導での成果と課題』の課題には、集中力に欠ける面や、落ち着きのなさ、気分によって授業態度が大きく変化してしまうことが多く見られ、それは家庭や各教科指導にも共通していた。これは、生徒の実態として生徒自身が国語力の足りなさを実感していない面が多く、家庭や学校で過ごす時に『困る』ということが少ないのではないかと考える。今後は、自立活動の指導や合同学習の中で、生徒自らが自分の国語力への課題に気付き、自ら学ぼうという意欲を持たせることが重要であると考え。今後も教科指導だけではなく、学級、家庭、寄宿舎、各教科担任と連携を深め、国語力、そして学力の向上へつなげていきたいと考える。

高等部の研究

V 高等部の研究

1 研究主題

「専門高校等との交流授業やデュアルシステムを活用した教育課程の編成」

2 主題設定の理由

近年、本校卒業生も他の高等学校卒業就職者と同様に産業構造の急激な変化等に対応できず、働くことの意義・目標を見いだせない者や職業とのミスマッチを起こす者もあり、早期離職を余儀なくされる者が少なくない。そこで、社会人として自立するために欠かせない様々な力を育成できる教育課程の編成が必要であると考えた。

※ 本研究は、平成24年度、平成25年度と文部科学省指定の特別支援教育に関する実践研究充実事業として行われた研究である。この研究についての詳細は「平成24年度～平成25年度 実践報告集」を参照のこととする。

3 研究の内容・方法

平成24年度の研究では、職業観や学力についての生徒の実態調査、インターンシップや交流及び共同学習を実施しての成果や課題を分析した。また、キャリア教育推進やデュアルシステム導入の先進校から情報収集を行った。そして、現行教育課程の課題の集約と分析を行った。

平成25年度の研究では、前年度の研究で見えてきた課題を基にインターンシップの在り方を見直した鹿児島聾学校版デュアルシステムの構築、前年度の反省を基にしたの交流及び共同学習の実施、修学旅行を見直した研修旅行の実施、大会等への参加推進等について研究を行った。また、国語、数学を中心に学力向上の取組を行い、これらを踏まえて社会人として自立するために欠かせない様々な力を育成できる教育課程の見直しを行った。

平成26年度は、前年度までに行った研究に伴い、就労体験中心のインターンシップから、企業と学校の専門学科・教科が連携する「鹿聾版デュアルシステム」まで発展させたインターンシップや、進路学習を充実させるための学校設定科目の導入と学力向上を目指して再編成した新教育課程が本格的に始動することとなった。そこで、今後生徒の実態に合わせて更に改善、発展させられるよう、前年度までの2年間研究してきた取組を基に実施・検証した。

4 研究経過

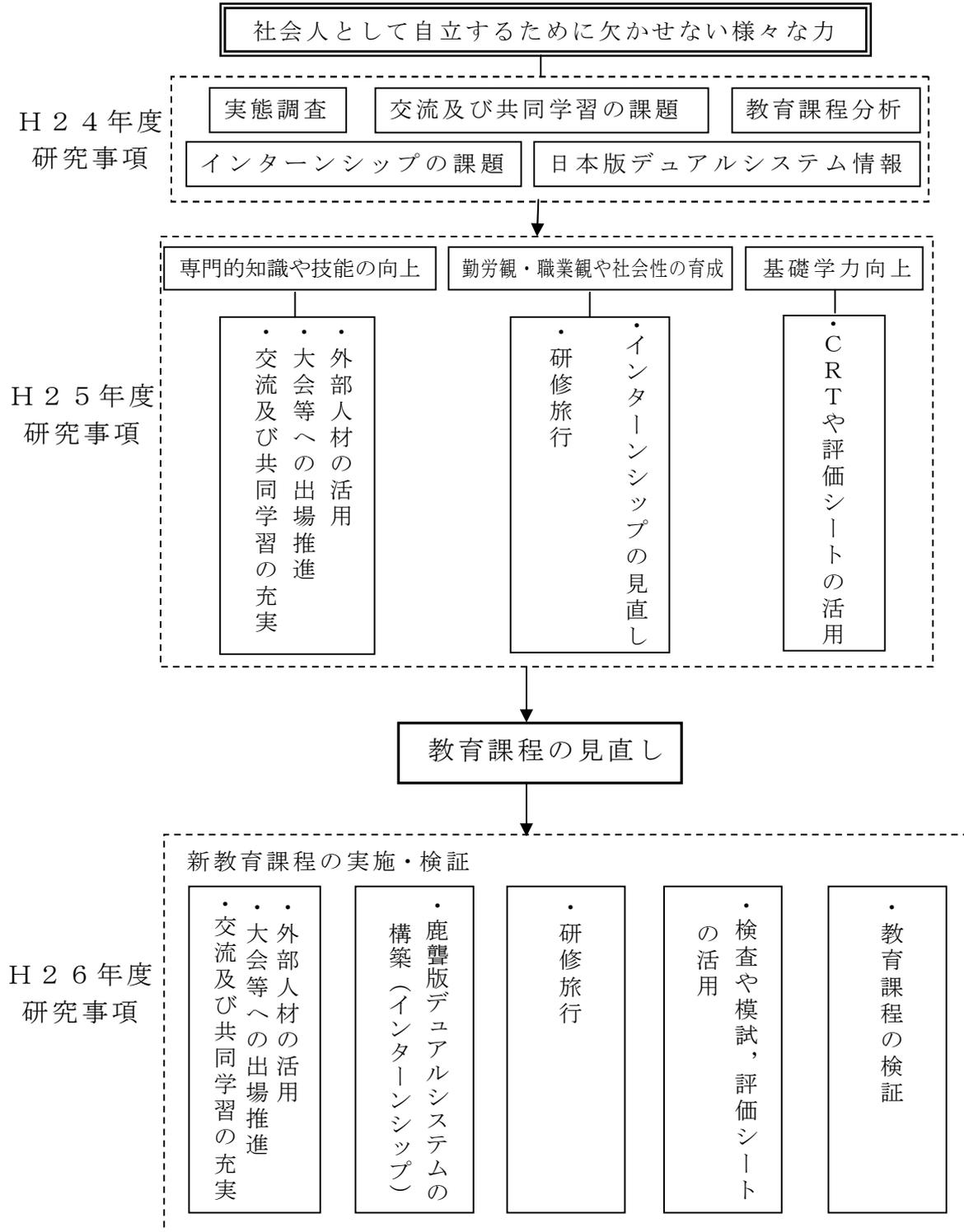
(1) 日程 通年それぞれグループごとに期日設定し、研究を進めた。

平成26年度の学部全体研修については以下のとおり。

期 日	内 容
4月11日(金)	今年度の学部研修について
9月 1日(月)	各グループの進捗状況、今後の研究について
12月22日(月)	各グループのまとめ報告、今後についての共通理解

(2) 内容

学部職員を小グループに分け，グループごとの研究を中心としながら，学部全体で共通理解を図り，検討していくという方法で進めた。年度ごとの研究の内容については以下のとおりである。



5 研究の実際

(1) 専門的な知識や技能の向上について

ア 被服科

(ア) 交流及び共同学習

日程	場所	内容
9月 5日	鹿児島女子高校	ファブリックステンシル講師による実技指導 (共同学習)
10月 7日	鹿児島聾学校	レクリエーション, ティッシュケース作り (交流学习)
12月 2日	鹿児島女子高校	レクリエーション, クッキー作り (交流学习)
12月16日	鹿児島女子高校	検定ジャケット時間測定 (共同学習)
1月30日	鹿児島女子高校	被服作品発表会鑑賞 (共同学習)



(イ) 大会等への出場

日程	内容
7月12日	鹿児島県障害者技能競技大会 (洋裁部門)

○ 鹿児島県障害者技能競技大会

洋裁部門 銀賞 1人
銅賞 1人



イ 産業工芸科

(ア) 交流及び共同学習

日程	場所	内容
10月7日～ 11月18日	鹿児島工業高校	ロボット競技大会に向けての練習及び意見交換 (交流及び共同学習)
12月16日	鹿児島工業高校	3DCADの学習 (共同学習)
1月20日 2月 5日 2月18日	鹿児島工業高校	木材加工品の製作 他 (共同学習)



(イ) 大会等への出場

日程	内容
8月22日	鹿児島県高等学校ロボット競技大会
7月12日	鹿児島県障害者技能競技大会（家具部門）
11月19日	生徒発表大会（ロボット競技部門）
11月21日 ～23日	全国障害者技能競技大会（家具部門）

- 鹿児島県高等学校ロボット競技大会 7位
- 鹿児島県障害者技能競技大会
 - 家具部門 銀賞 1人
 - 銅賞 1人
 - 努力賞 1人
- 生徒発表大会
 - ロボット競技部門 アイデア賞
- 全国障害者技能競技大会
 - 家具部門 銅賞 1人



(ウ) 外部人材の活用

日程	内容
7月11日	障害者技能向上支援事業「福丸工芸」（職場見学）
7月15日	障害者技能向上支援事業「色紙掛け制作」（技能体験教室）



ウ 理容科

(ア) 交流及び共同学習

日程	場所	内容
5月29日	鹿児島県理容美容専門学校	カッティング、ワインディングの共同学習
1月22日 ～23日	長崎県立ろう学校	九州地区聾学校理容技術学習交流会 専攻科：国家試験部門 3年：カッティング部門



(イ) 大会等への出場

日程	内容
6月15日	第66回鹿児島県理容競技大会
8月17日	第6回全国理容美容学生技術大会九州地区大会

○ 第66回鹿児島県理容競技大会

ワインディングの部 敢闘賞 1人

ミディアムカットの部 敢闘賞 1人

ミディアムカットの部 生活衛生営業指導センター敢闘賞 1人



(ウ) その他校外での学習

日程	内容
7月3日	特別養護老人ホームでの理容ボランティア活動
12月11日	
2月19日	



(2) 勤労観・職業観や社会性の育成について

ア インターンシップ

(ア) I期・II期実施内容

a I期インターンシップ

- ・ 期日：平成26年6月9日(月)～13日(金)
- ・ 事前・事後学習：5月26日(月) 6校時 事前学習，説明
6月2日(月) 5校時 激励会
6月16日(月) 5，6校時 事後学習，お礼状作成等

b II期インターンシップ

- ・ 期日：平成26年10月27日(月)～31日(金)
(※ 一部の生徒について，実習先との調整により他の期日に実施)
- ・ 事前・事後学習：10月20日(月) 5校時 事前学習，説明
11月10日(月) 5，6校時 事後学習，お礼状作成

(イ) インターンシップ報告会

- ・ I期 平成26年6月22日(日) ※ 日曜参観時
- ・ I・II期 平成27年1月19日(月) 5，6校時(予定)

イ 研修旅行

日時：平成26年5月13日(火)～16日(金)

場所：関東方面(東京，千葉)

参加者：高等部生徒4人 職員4人

旅程

		行 程
1日目 5/13(火) 全体行動		鹿児島空港→羽田空港＝国会議事堂・文部科学省＝ホテル
2日目 5/14 (水) 学科別行動	被服科 (2-1)	ホテル＝歌舞伎座＝日本テラー学院 ＝東京スカイツリー，ソラマチ＝江戸そば体験 ＝浅草(雷門)＝シャネル銀座・エルメス銀座＝ホテル
	産業工芸科 (2-2)	ホテル＝江戸東京博物館＝東京スカイツリー，ソラマチ ＝塚田工房＝浅草(雷門)＝ホテル
	産業工芸科 (2-3)	ホテル＝篠原まるよし風鈴＝東京スカイツリー，ソラマチ ＝塚田工房＝浅草(雷門)＝ホテル
3日目 5/15 (木) 学科別行動	被服科 (2-1)	ホテル＝築地市場＝東京ミッドタウン＝Toshi Yoroizuka ＝109メンズ館＝水野雅己装図教室＝ホテル
	産業工芸科 (2-2)	ホテル＝科学未来館(科学実験)(ワークショップ)(館内見学) ＝トヨタ MEGAWEB＝ホテル
	産業工芸科 (2-3)	ホテル＝警視庁＝秋葉原電気店街＝科学未来館 ＝国立科学博物館＝ガラス工房ヒコロ＝ホテル

4 日 目 5/16 (金) 全体行動	ホテル ― 東京ディズニーシー ― 羽田空港 ― 鹿児島空港
---------------------------	--------------------------------

事前学習：平成 25 年 10 月 1 日～平成 26 年 5 月 12 日 14 時間

事後学習：平成 26 年 5 月 19 日 4 時間

報告会：平成 26 年 6 月 22 日 日曜参観



(3) 基礎学力の向上について

- ・ 5月に国語，数学，英語のCRT検査を実施した。
- ・ 各教科それぞれでまとめていたCRT検査結果の書式を統一した。(資料1)
- ・ 学力定着状況を把握するため，また，次年度の就学への意識付けを現時点から行うために，高等部2年生の就職希望者を対象に新たな模試を検討，導入した。今年度は1月に1回目を行い，来年度の1学期内に2回目を行う予定である。

(4) 教育課程について

平成26年度教育課程(年間指導計画)の実施による検証として職員アンケートの実施をしたり，平成27年度教育課程案編成を行ったりした。主な変更点は下記のとおりである。

- ・ 国語を年間6単位から9単位に増やした。
- ・ 地歴公民の履修学年を変更し，2年次に世界史A，3年次に現代社会を履修することとした。
- ・ 数学の時数を1年次に2単位から3単位に増やし，2，3年次に数学Ⅱを選択科目に入れた。
- ・ 理科の履修学年を変更し，1，3年次に必履修，2年次に選択履修とした。
- ・ 英語表現Ⅰを3年次の履修科目に入れた。
- ・ 1年次の芸術で選択できる科目を，美術・書道・音楽の3科目に増やした。
- ・ インターンシップによる就業体験の充実と，就職試験や大学受験に必要な学力の定着を目的として，学校設定科目「キャリアアップ」を設定した。(※「総合的な学習の時間」は「課題研究」で代替とする。)

6 研究の成果と今後の課題（次年度へ向けて）

（1）専門的な知識や技能の向上について

ア 被服科

（ア）成果

- ・ 昨年度「交流学習を増やして、もっと鹿児島女子高生と交流を行いたい」という希望があったので、回数を増やして実施した結果、今年度の交流学習後のアンケートでは「以前よりも回数が増え、お互いに顔が分かり、話しかけやすかった」という感想があった。鹿児島女子高生に本校に来てもらい、施設参観をしてもらうことで、聴覚障害教育に関心をもってもらう機会になった。
- ・ 共同学習においては、外部講師の下で学習するいい機会となった。また、本校生以外の多くの生徒と学習の場を共有することで、創造性の高い作品に仕上がった。
- ・ 障害者技能競技大会への大会出場という目標をもつことで、授業の中の取組が更に意欲的になった。大会基準に沿って指導のポイントを絞ることで、生徒の技術の定着につながり、その結果、出場した生徒全員が入賞することができた。また大会での反省を活かして、更なる技術の向上をめざし取り組むようになった。

（イ）課題

- ・ お互いの学校の学習進度が合わず、共同学習の日程調整をするのが難しかった。年間指導計画を立てる段階での打合せも必要ではないか。
- ・ 共同学習の回数が1回なので、その場限りになりがちである。

（ウ）今後に向けて

- ・ 定期的にお互いの進捗の確認や年間指導計画を立てる段階で打ち合わせを行うなどの事前の打ち合わせを今以上に充実させる。
- ・ 共同学習を単発で終わらせるのではなく、複数回設定し、継続的に同じ集団で学習できるようにする。

イ 産業工芸科

（ア）成果

- ・ ロボット競技大会に向けて一般の工業高校生との交流学習、共同学習では、同じ目標に向け一緒に活動する生徒の間には友情とライバル心が芽生え、学習効果を高めながら親睦を深めることができた。
- ・ 障害者技能競技大会に向けて練習を繰り返し行うことで、専門的な知識や技術、忍耐力が身に付くとともに、生徒自身の自信につながり様々なことに意欲的に取り組むようになった。
- ・ 技能向上推進事業に参加することによって、現場でしか学ぶことのできない昔ながらの巧みな技術や細かな技を見学、体験できたことは大きな刺激となり、その後の学習に大いにつながった。

(イ) 課題

- ・ 交流学习における生徒同士のコミュニケーションは、共有する時間に比例するため、今後も今年度のような継続的な交流学习が望まれる。
- ・ 共同学習において、標準学級と重複障害学級との知識・技術差があり、同じ実習内容をするのは難しい。
- ・ 大会等への出場に必要な技術を習得するための練習時間や練習環境を確保することが難しい。
- ・ 大会等へ出場する場合、使用する工作機械、工具、材料、部品により作品への精度の影響が大きく、環境を整えることが重要である。
- ・ 生徒の技術的な完成度を高めるためには、職員自身の技術向上や専門性を高める必要がある。
- ・ 聴覚障害者への理解を深め、技術力の向上を図る工夫が必要である。

(ウ) 今後に向けて

- ・ 今後も生徒の専門的知識・技術向上を図りながら、集団生活における自主性・協調性や社会人になったときに必要な積極性・社交性を培うことのできる内容を模索し、計画を立てていきたい。
- ・ 多くの情報や資料を収集し、生徒の実態に合った学習の機会を提供できるように日々の教材研究を充実しなければならない。
- ・ 工業教育においてはその学習の成果を「ものづくりは人づくり」と例えてきたが、ものづくりの学習を通じて生徒自身の「生きる力」につなげることこそが、教師に与えられた使命であり、これからも継続していかなければならないと考える。

ウ 理容科

(ア) 成果

- ・ 鹿児島県理容競技大会では、生徒全員が敢闘賞を受賞することができた。
- ・ 校外実習では、生徒が目標を持って積極的に活動し利用者の方に喜んでもらえることで理容に対する意欲を更に高めることができた。
- ・ 専攻科2年生の最終目標である理容師国家試験に二人共に一回で合格することができた。

(イ) 課題

- ・ 夏休みの指導の方法（国家試験受験や九州大会へ向けての練習）について、これまでは、保護者の協力もあり、学校で指導することができていたが、通学に長時間かかる生徒についての指導を今後どのようにするかについて、理容科だけではなく、保護者も含めて話し合いを進める必要がある。
- ・ 外部人材の活用については、生徒の理容に対する意識向上を目的とした人材の掘り起こしを今後も積極的に進めていく必要がある。

(ウ) 今後に向けて

- ・ 共同学習をより充実したものにするため、専門学校と事前に打ち合わせを重ね、連携を深め、外部人材についての情報など、収集していきたい。
- ・ 夏休み中の国家試験受験対策講習会に本年度も4回参加することができた。今後も専門学校との日程を調整しながら多く参加できるようにしていきたい。

(2) 勤労観・職業観や社会性の育成について

ア インターンシップ

(ア) 成果

- 職員アンケートから
 - ・ インターンシップに行く前に比べ、終了後は緊張感が多少あったように感じた。
 - ・ 一生懸命実習に取り組むようになり、挨拶で声を出すようになっている。
 - ・ 考えて仕事をする姿勢が身に付けば、より良くなると思う。
- 生徒の作文、自己評価表から
 - ・ 「早いね」と言われ、嬉しかった。商品にキズをつけないように意識した。
 - ・ 経験のない仕事にも挑戦して多くの仕事を知って、進路決定につなげたい。
 - ・ 卒業までに、カットやシャンプーなどいろいろな技術を身に付けていきたい。
 - ・ I期ではあまりできなかったコミュニケーションを、II期では積極的にとることができた。

(イ) 課題

- 事前・事後学習について
 - ・ インターンシップの説明やマナー等に関する事前・事後指導が最低限であったり、発表の準備等に終始したりしている。
 - ・ I期・II期で計7時間しか事前、事後学習が行えていない。実習に対する気持ちや意欲を高める指導の工夫が必要である。
- インターンシップ報告会
 - ・ 全員が統一した書式や形式での発表ではなく、生徒それぞれの工夫が見られる報告会にする。
 - ・ 他学部の生徒、職員や保護者にも参観していただき、高等部の取組を発信する場として報告会を設定し、学部間で連携したキャリア教育を行うための工夫が必要である。
- 評価表、日誌の書き方や活用
 - ・ I期の課題からII期の目標設定を行ったが、実習先からの評価表と自己評価表を比較しづらい様子があった。

- ・ 日誌が，時系列で実習内容を記述するのみにとどまっており，実習の感想や学んだことに関する内容が少なかった。

(ウ) 今後に向けて

- 事前・事後学習の時間の確保，内容の検討
 - ・ 現行の時間割実施において，「総合的な学習の時間」や「キャリアアップ」は行事等の実施による不足授業の補充が行われているため，授業時数の確保については，教育課程係等と相談，検討の上調整を行う。
 - ・ 全体での事前・事後学習や指導，確認の他に，学級で各生徒に合った指導を行ったり，より良いマナーを身に付け，実習先の情報や関連する職場について調べたりする時間などを設ける。
- インターンシップ報告会
 - ・ 1月の報告会の実施後，高等部，中学部からアンケートをとり，来年度の実施内容について検討を行う。
- 評価表や日誌等の書式の検討

イ 研修旅行

(ア) 成果

- ・ 事前学習により訪問地の情報が把握でき，行程が順調に行われた。
- ・ 学科別の体験研修により，伝統工芸の技術の体験を通して，伝統を残す難しさやものづくりの素晴らしさを学んだ。
- ・ 体験研修では，生徒が一生懸命に取り組み，今後の学習活動のよい刺激となった。
- ・ 公共交通機関の利用により交通マナーや公衆道徳を学ぶことができた。
- ・ 各訪問地で働いている人の様子に触れ，勤労観・職業意識が高まった。
- ・ 集団行動により，他人への気遣いや思いやりの大切さを学んだ。
- ・ 報告会を実施することで，旅行の内容を振り返るとともに，言語活動や表現力を高めることができた。

(イ) 課題

- ・ 4日間公共交通機関利用のため，移動や乗換えなどが多く時間に追われ，連日歩き疲れた様子が見られた。
- ・ 研修場所や見学場所が多すぎて，内容の理解が深まらず，時間に追われた感じであった。
- ・ 科別の研修や見学が多く，全員で行動する時間が足りなかった。
- ・ 実施時期が中間テスト直前やインターンシップ前になり，その後の行事に影響を及ぼさない時期に実施したほうがよい。
- ・ 移動手段すべてを公共交通機関での移動とすると，移動時間も掛かり，生徒の

疲労も大きくなるので効率的な移動手段を検討すべきである。

- ・ 更に目的に合った訪問場所の提案や体験場所等への申込等についても、旅行業者へ委託した方がよい。

(ウ) 今後に向けて

- ・ 生徒の実態に合った見学場所，研修場所の選定を行う。
- ・ 公共交通機関等の利用のため，生徒，引率職員の疲労及び負担を軽減するために，なるべく訪問場所を精選し，目的を十分に達成できるような行程で実施する。
- ・ 実施時期日程などについても，今後検討すべきである。
- ・ 宿泊ホテルでの2食（朝・夕）を原則とし，昼食も事前に決めておく。（旅行業者依頼）
- ・ これまでは，文科省指定の研究校としての取組として「研修旅行」の位置付けであったが，事後の反省や生徒への教育的効果などを考え，以前の「修学旅行」との違いを比較検討しながら根本的な位置付けも含め，実施方法や内容等を検討していく必要がある。

(3) 基礎学力の向上について

ア 成果

- ・ CRT検査結果の書式を統一し，試験結果の得点率をグラフにまとめたことにより，前年度との成績を比較しやすくなり，生徒にどの程度の力が付いたのかを教科担当が把握しやすくなった。また，これまではどのように学力が伸びたのかを，検査結果を基に保護者へ説明，補足する必要があったが，3年間の得点率をグラフ化したことで，これまでに生徒が身に付けた学力の伸び幅，推移が一目で分かるようになった。

イ 課題

- ・ 行った検査の内容をいかに還元すべきかが明確に定まっておらず，現在の段階では各教科担当に一任されている。保護者からの質問があった場合に，どうなっているかを説明することが難しい。
- ・ 2年次に行う校外模試の検討，選定を今回は係だけで行ったが，本校の生徒に適しているか，否かの判断をすることが現時点では難しい状況にある。

ウ 今後に向けて

- ・ 今年度から行う2年生を対象とした校外模試について，生徒に受験させるのに内容が適当であるか，実施時期はいつがよいかなどの検証を行い，次年度にどのような方法を取るか，また，行った模試を確実に生徒に活かすにはどうしたらよいかを，今後全体で検討していきたい。
- ・ CRT検査については今後も継続して行う予定である。CRT検査の結果をどのように授業に反映させていくのか，どのような取組をしていくのかを，教科ごとに提案・実施するのではなく，学部として足並みをそろえていきたい。

(4) 教育課程について

ア 成果

- ・ 交流及び共同学習，大会等への参加は年間指導計画にも位置付けて実施している科目もある。参加方法や時数については，それぞれの科の実態や科目の内容によってまちまちではあるが，授業とも関連付けさせながら進められており，教育課程上定着しつつある。
- ・ インターンシップ実施時期を6月と10月と明確にし，生徒の参加方法も夏季休業中の希望制から授業として位置付けたため，インターンシップの反省を生かしやすくなった。
- ・ 研修旅行としての実施は2回目となり，科の特徴に合わせた研修を組むことが定着しつつある。
- ・ 定期テストとの兼ね合いも考えながら基礎学力向上に向けて対外模試等の実施が定着しつつある。

イ 課題

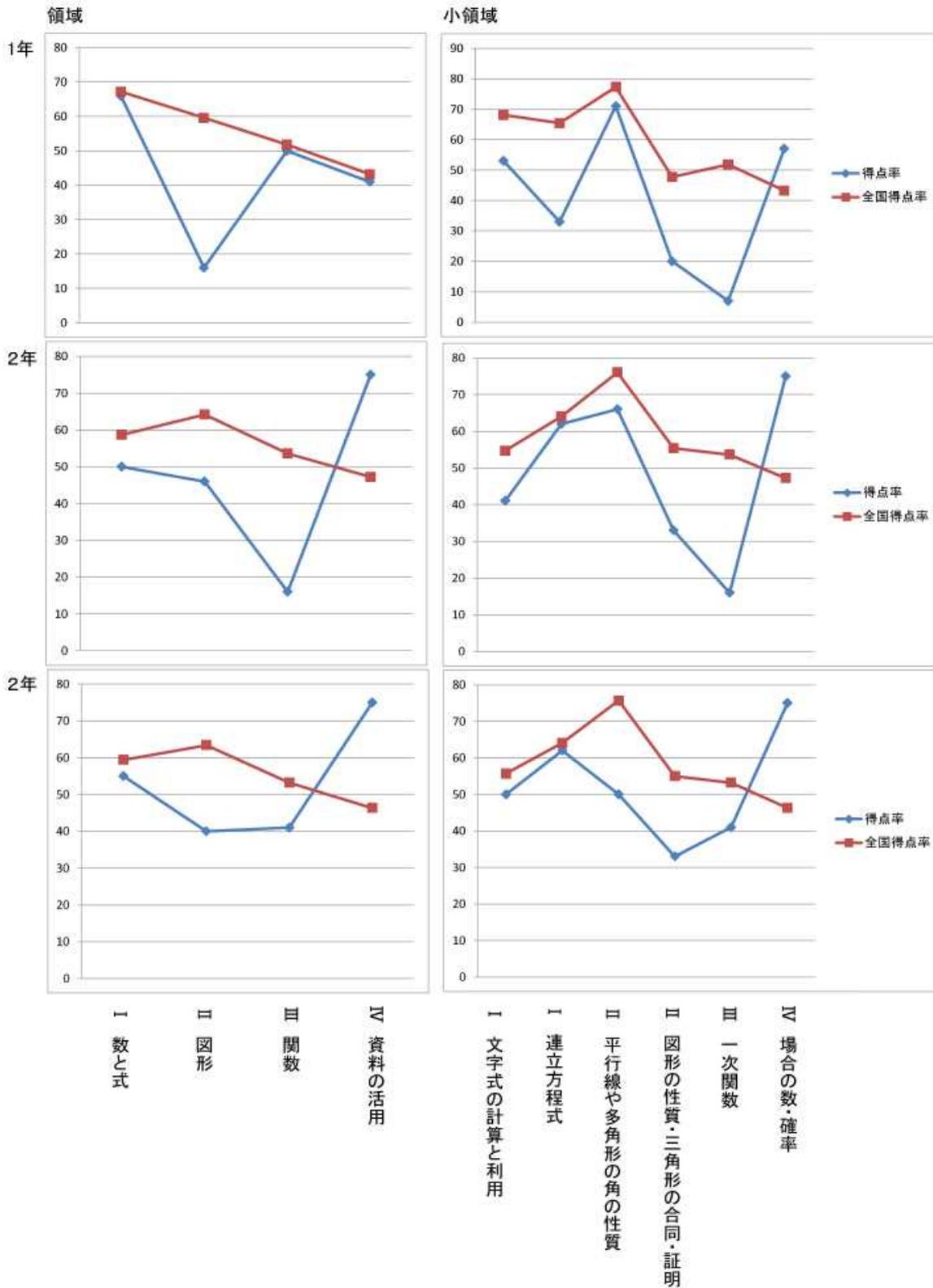
- ・ 生徒の実態や相手校との関係もあり，年度当初から交流及び共同学習を計画することは難しい。
- ・ インターンシップの事前学習，事後学習，発表方法（報告会）の内容及び時数の検討が必要である。
- ・ 研修旅行については，生徒の実態に応じて，研修内容を検討する必要がある。
- ・ 生徒の実態，進路希望に応じて様々な対外模試の実施とその結果の活用方法の検討が必要である。授業時数を減らさないためにも，授業としてカウントするテストと放課後実施するテストとの区別が必要である。（教育課程上に位置付けるかどうか）また，授業の内容や教員間，教科間の指導目標などを共通理解して学力向上に向けて取り組んでいくことはできないか検討が必要である。（個別の指導計画の活用や共通理解の会，科会，学年会の活用）
- ・ LHR，総合的な学習の時間，学校行事の時数が多く，また LHR，総合的な学習の時間が月曜日になったので，祝祭日，振替休日で実施できないことが多く，全体での行事や指導等の時間設定が難しく，教科の授業時数が削られている。カウントの工夫，検討が必要である。
- ・ 週2回の7校時がある生徒とない生徒がおり，学級運営が難しいクラスもあった。

ウ 今後に向けて

- ・ 単元ごとあるいは月ごとなど定期的なスパンで内容，時数，カウントなどの見直しをしたり，行事などの反省を次年度の教育課程編成や年間指導計画作成に生かせたりできるような体制の構築が必要である。

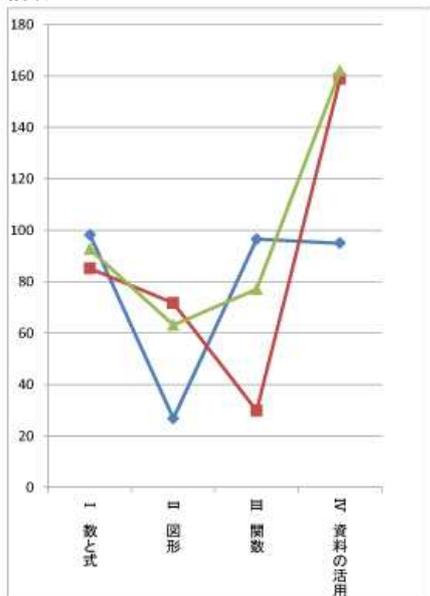
標準学力調査(CRT)結果

高等部 3年 ○○ ○○

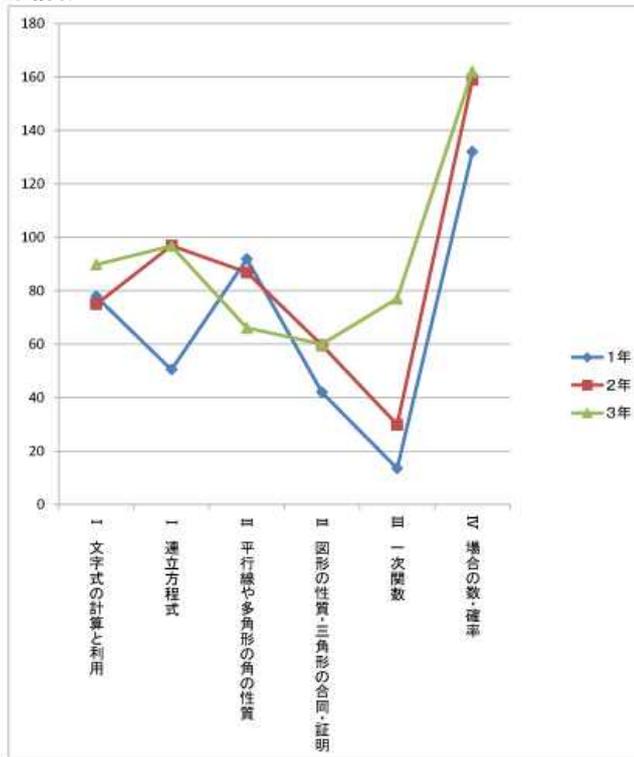


受験年度別 標準学力調査(CRT)得点推移

領域



小領域



H24.6.26実施
中3CRT

H25.5.20実施
中3CRT

H26.5.20実施
中3CRT

	内 容	1年			2年			3年		
		得点率	全国得点率	全国比率	得点率	全国得点率	全国比率	得点率	全国得点率	全国比率
領域別	I 数と式	66	67.2	98.21	50	58.7	85.18	55	59.4	92.59
	II 図形	16	59.6	26.85	46	64.2	71.65	40	63.4	63.09
	III 関数	50	51.8	96.53	16	53.6	29.85	41	53.2	77.07
	IV 資料の活用	41	43.2	94.91	75	47.2	158.9	75	46.3	162
小領域別	I 文字式の計算と利用	53	68.1	77.83	41	54.7	74.95	50	55.7	89.77
	I 連立方程式	33	65.4	50.46	62	64	96.88	62	64.1	96.72
	II 平行線や多角形の角の性質	71	77.3	91.85	66	76	86.84	50	75.7	66.05
	II 図形の性質・三角形の合同・証明	20	47.7	41.93	33	55.4	59.57	33	55	60
	III 一次関数	7	51.8	13.51	16	53.6	29.85	41	53.2	77.07
	IV 場合の数・確率	57	43.2	131.9	75	47.2	158.9	75	46.3	162

※全国比率は全国得点率に対する得点率の割合(全国得点率を100としています)

担当より

全体的に学年が上がることに少しずつ伸びが見られます。資料の活用においては、1年生の時から全国平均を大きく上回り、素晴らしいですね。
図形に関する学習がやや苦手なようなので、苦手を学習も伸ばしていけるよう、復習していきましょう。

寄宿舎の研究

VI 寄宿舎の研究

1 研究主題

「学力向上を目指した取組」

～生活の中で豊かなことば・知識を育てる取組を通して～

2 主題設定の理由

本校寄宿舎は、現在幼稚部から高等部（専攻科）までの幅広い年齢層の子どもが集団生活を送っている。私たちは日々の生活の中で、子どもたち一人一人が自立し社会参加できる力を培うための支援を行っている。

聴覚に障害があるということは、聞こえにくいということだけでなく、情報が入りにくく「ことば」の獲得が難しいことを意味する。これらのことは社会生活を送る上で、コミュニケーションがうまくとれない要因になっていると考えられる。

そこで寄宿舎では、平成24・25年度、「生活の中で豊かなことば・知識を育てる取組を通して」というテーマの下、新聞や本の活用、実生活に基づいたテーマについての学習会、日々の生活の中でのことばの確認等を行った。

2年間の取組の中で、少しずつではあるが、新聞記事の掲示に目を止めたり、新聞に親しみを感じられたりする様子も見受けられた。また、当番活動の一つとして、ミーティング時に、新聞記事を発表する取組も定着してきた。

そこで、平成26年度はより充実した内容になるよう、実践内容を工夫し、「伝える力」を育て、自ら学ぼうとする意欲の向上につながる取組にした。

3 研究の方法

【学校研究主題】

学力の向上

【寄宿舎研究主題】

生活の中で豊かなことば・知識を育てる

- ・ 指導方法の実践
- ・ 職員研修
- ・ 実態把握と分析
- ・ 研究のまとめ

身の回りのことばや知識の習得

自ら学ぼうとする意欲の向上

4 研究経過

(1) 平成24年度

	研究計画	内容
4月	<ul style="list-style-type: none"> 研究主題 実践内容の方法確認 	
5月	<ul style="list-style-type: none"> 研究紀要年間計画 	
	<ul style="list-style-type: none"> 実践：情報の提供 	<ul style="list-style-type: none"> アンケートによる実態把握 新聞の活用 季節の情報
7月	<ul style="list-style-type: none"> 実践：テーマ学習会 	<ul style="list-style-type: none"> 講話「先輩の話を聞こう」
	<ul style="list-style-type: none"> 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害の理解について
8月	<ul style="list-style-type: none"> 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> 発語について
	<ul style="list-style-type: none"> 実践：テーマ学習会 	<ul style="list-style-type: none"> ロールプレイング 「通院体験をしよう」
	<ul style="list-style-type: none"> 実践：テーマ学習会 	<ul style="list-style-type: none"> 「遊びのルールを学ぼう」
9月	<ul style="list-style-type: none"> 実践：本の活用 	<ul style="list-style-type: none"> 読み聞かせ 読書時間の設定 読書コーナーの設置
12月	<ul style="list-style-type: none"> 実践：テーマ学習会 	<ul style="list-style-type: none"> 「ゴミの分別を学ぼう」
2月	<ul style="list-style-type: none"> 研究のまとめ 	
3月	<ul style="list-style-type: none"> 研究の発表 	

(2) 平成25年度

	研究計画	内容
4月	<ul style="list-style-type: none"> 研究主題 実践内容の方法確認 	
5月	<ul style="list-style-type: none"> 研究紀要年間計画 実態把握 	
6月	<ul style="list-style-type: none"> 方法の検討 実践① 	<ul style="list-style-type: none"> アンケートによる実態把握 情報の提供（新聞の活用）
7月	<ul style="list-style-type: none"> 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> 人工内耳について
8月	<ul style="list-style-type: none"> 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> 南日本新聞社「よむのび教室」
9月	<ul style="list-style-type: none"> 実践 	<ul style="list-style-type: none"> 新聞記事の発表（中・高）
10月	<ul style="list-style-type: none"> 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> 学部職員の講話 情報の提供（小学生新聞の購読）
11月	<ul style="list-style-type: none"> 実践③テーマ学習 	
12月	<ul style="list-style-type: none"> 九聴研報告会 	
1月	<ul style="list-style-type: none"> 研究のまとめ 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> 研究のまとめ 	
3月	<ul style="list-style-type: none"> 年度末報告会 次年度の研究内容の検討 	

(3) 平成26年度

	研究計画	内容
4月	<ul style="list-style-type: none"> 研究主題 実践内容の方法確認 	<ul style="list-style-type: none"> 情報の提供 新聞記事の発表（中・高） 小学生新聞の購読
5月	<ul style="list-style-type: none"> 研究紀要年間計画 方法の検討 	<ul style="list-style-type: none"> 記録用紙の検討
6月	<ul style="list-style-type: none"> 実践 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> DVD視聴 「人工内耳装用者の体験談」
7月		
8月		
9月		<ul style="list-style-type: none"> 記録用紙の見直し
10月	<ul style="list-style-type: none"> 職員研修 	<ul style="list-style-type: none"> DVD視聴 「自閉症に関する内容」
11月	<ul style="list-style-type: none"> 実践：テーマ学習 	<ul style="list-style-type: none"> ロールプレイング 「通院に関すること」
12月	<ul style="list-style-type: none"> 実態把握 研究のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> アンケート実施
1月	<ul style="list-style-type: none"> 実践：テーマ学習 研究のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> 「マナーについて」
2月	<ul style="list-style-type: none"> 研究のまとめ 	
3月	<ul style="list-style-type: none"> 年度末報告会 次年度の研究内容の検討 	

5 研究の実際

(1) 情報提供の取組～新聞の活用

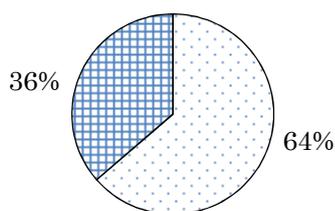
ア はじめに

日常生活の中で、新聞を読む姿がほとんど見られない現状を受け、実態把握のためのアンケートを実施した。

【アンケート結果】

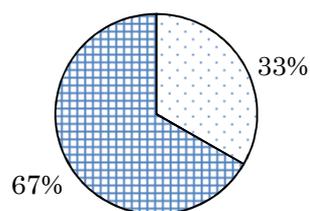
新聞を読んでいますか？
(男子寮)

□はい ■いいえ



新聞を読んでいますか？
(女子寮)

□はい ■いいえ



Q どんな記事が好きですか？（「はい」と答えた舎生に対して）

- ・ エンタメ ・ マンガ ・ 世間の話題 ・ 天気予報
- ・ スポーツ ・ テレビ番組 ・ 「人」の記事
- ・ 興味のあるニュースだけ ・ おもしろいもの
- ・ 中身を読むわけではないが見る

Q 読まない理由（「いいえ」と答えた舎生に対して）

- ・ 読めない（2） ・ 難しい ・ 漢字が多くて難しい
- ・ 長くて疲れる ・ テレビがある
- ・ 勉強があるし、仕事があるから読む時間がない
- ・ 新聞よりテレビのニュースを見るから

イ 実際

アンケートの結果、半数以上の舎生が新聞を読んでいないことが分かった。また、男子に比べ女子は大多数が読んでおらず、新聞に対する興味の薄さがうかがえる。「読めない」「難しい」「長くて疲れる」等の理由を踏まえ、アンケート結果にある、舎生の好きな記事を参考にして、毎日の新聞記事の中から、舎生が興味を持ちそうな記事を職員が選び、玄関前など目に触れやすい場所に掲示する取組を行った。

掲示する際にコメントを書き加えたり、ミーティング時に説明をしたりして、より理解を深められるようにした。



（写真1：掲示している新聞記事を読んでいる様子）

ウ 成果

- ・ 関心が薄かった舎生が、下校後にまず掲示している記事に目を通すようになった。
- ・ 起床後に新聞で天気予報を確認する姿が見られるようになった。
- ・ 舎生から「何が書いてあるかが楽しみ」とか「自分では見ない記事を見るようになったのでこれからも続けてほしい」といった感想が聞かれた。

エ 課題

- ・ 年齢に差があるため、低学年になるにつれて内容を理解できない舎生が増えた。

(2) 幼稚部・小学部生への取組

ア 小学生新聞の活用

(ア) はじめに

新聞の活用方法を研修するために、職員研修として、南日本新聞社の「よむのび教室」を受講した。講座の中で、小学生にも取り組むことができる、地図を使用した新聞の活用方法を学んだ。

平成25年11月からは、記事の内容をより理解しやすいように、小学生新聞の購読を始め、活用することにした。

(イ) 実際

(1)で示したように、新聞記事を掲示して、情報提供をする取組をしている。小学部生にとっては、内容が難しかったり、読めない漢字が多かったりするためか、積極的に記事を読む様子はあまり見られない。

そこで、小学部生に対しては、興味・関心を持ちそうな話題や写真を職員が選び、ミーティング時に紹介した。記事を見た舎生は、その記事がどの地域・県の内容かを地図で確認し色を塗った。(写真2)



(写真2：地図に貼った新聞記事)

男子寮では、当番の舎生が興味を持った写真や記事を選び、ミーティング時にみんなで読んだ。(写真3)

女子寮では低学年の舎生が新聞記事に触れるきっかけ作りとして、小学生新聞の中から職員が記事を選んで紹介したり、掲載されているクイズを一緒に楽しんだりした。



(写真3：小学生新聞を読んでいる様子)

(ウ) 成果

- ・ 新聞に触れる機会が増えた。
- ・ 身近にある出来事を話題にすることができた。
- ・ 天気予報が載っていることを知り、自分で確認する様子が見られた。
- ・ クイズや身近な話題には興味を持った。
- ・ ミーティング前に自主的に新聞を読んで発表することもあった。
- ・ 分かりやすい内容や写真に興味を持って見ている。
- ・ テレビのニュースでも様々な出来事に興味を持つようになった。世界の出来事も話題になった。

(エ) 課題

- ・ 職員と一緒に新聞を読むことはあっても、自分から読むことはなかった。
- ・ 読書は好きだが、新聞は嫌いという舎生もいるので、身近な話題を提供しながら、まずは抵抗感をなくしたい。

イ 絵本の読み聞かせ

(ア) はじめに

寄宿舎では、幼稚部生に対して本に親しむ機会をつくり、活字に興味を持てるように、絵本の読み聞かせの時間を設けている。

小学部生も、図書館から好きな本を選んで借りてきたり友達と交換して読んだり、絵本に対しては親しみを持っている様子が見られる。

(イ) 実際

男子寮では、毎日就寝前の30分間読み聞かせを行った。(写真4)

女子寮では、毎日の読み聞かせに加えて、毎週木曜日には幼稚部生と小学部生と一緒に「大型絵本」を読む時間を設けた。(平成26年度)(写真4)



【男子寮】



【女子寮】

(写真4：絵本の読み聞かせの様子)

(ウ) 成果

- ・ 本に親しむ姿勢ができた。
- ・ 本に対する興味が増した。
- ・ 本の中にある言葉を覚えるようになった。

当初は、新聞に目を通すこと自体になじまなかったり、面倒に思ったりしていて、意欲的に取り組む様子はなかった。そこで、気になった記事や楽しそうな記事、何でもいいので自分なりに選んでみるように助言したところ、少しずつ記事を選ぶようになってきた。選んでいる内容は、事件・事故・天候・スポーツ・地域の話等、様々であった。

また、発表の仕方についても、選んだ記事そのまま読み上げていたので、記事を選んだ理由や、内容についての感想、疑問点も発表時に添えるように助言した。しかし、「楽しかった」とか「面白かった」という簡単なものに留まっており、もう少し工夫が必要であると感じた。

(イ) 平成26年度

新聞記事の発表は平成26年度も継続して行うことにし、舎生が新聞記事の内容をまとめやすくするために、新たに記録用紙作成した。(図2)

〈記録用紙の内容〉

- ・ 気になる新聞記事の見出しを書く。
- ・ いつ、どこで起きた出来事かを書く。
- ・ 記事の大事なところに線を引く。
- ・ 記事を選んだ理由を書く。
- ・ 感想やもっと知りたいこと、調べたいことを書く。

月 日 曜日 当番

気になる新聞記事

記事の見出し 『 』

いつ()どこで()あったか

ここに記事を貼ります
☆大事なところに線を引きましょう☆

この記事を選んだ理由

感想・もっと知りたいこと・調べてみたいことなど

うれしい 楽しい 面白い びっくり 驚いた

(図2：記録用紙)

記録用紙を工夫したことで、記事の見出しやいつ起こった出来事かなど、簡単なことは読み取れるようになった。しかし、内容に関しては、新聞記事に線を引いた部分を読み上げるだけの舎生が多く、発表者自身が内容をうまく理解できていないことも多かった。結果、聞いている舎生にも記事の内容が伝わっていかない様子が見え始めた。

そこで、2学期からは、記録用紙を見直し、内容を事前にまとめる項目を加えた。また、記事の内容が分かりやすくなるように、新聞記事を貼るスペースを別に設けた。(図3) 発表者は記事を読んでいる人にも見せながら発表することにした。

(図3：変更後の記録用紙)

記事を貼るスペースを別紙に設けたことで、発表する際に他の舎生が記事に注目するようになった。(写真5) また、少しずつではあるが、記事をよく読み、事前に内容をまとめることができるようになってきた。(図4)

さらに、発表時に他の舎生からの質問を受け、返答できなかったことを自分で調べ、後日発表することができるようになった舎生もいた。(事例1)



(写真5：ミーティングで新聞記事を発表している様子)

10月30日 木曜日 当番

気になる新聞記事

記事の見出し 『エボラ死者5000人超す』
いつ(10/29)どこで(西アフリカ)あったできごとです

どんなことが書いてありましたか？(発表内容)

西アフリカを中心に流行するエボラ出血熱、
の死者が54人を超えたと見られると明らか
にした。約1か月半で倍増。流行はなお拡大
している。死者を含む感染者数は1万3703人に達した。

この記事を選んだ理由
エボラ出血熱、死者が5000人ってびっくりした
からです。

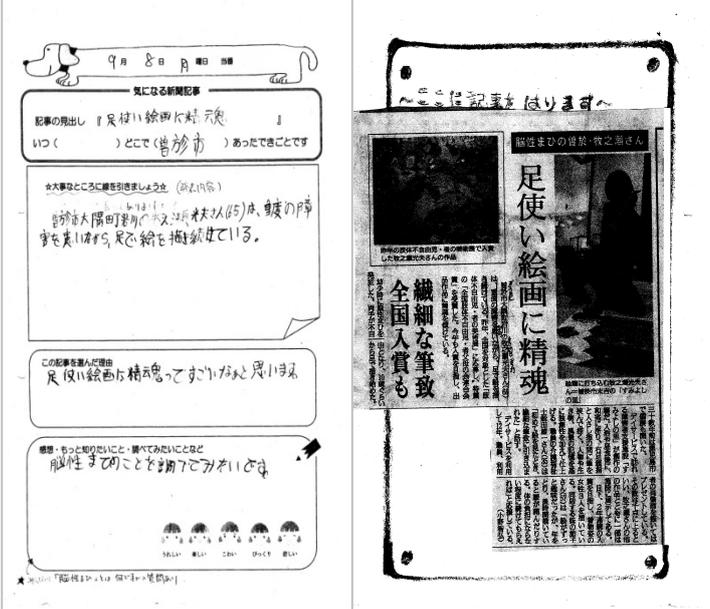
感想・もっと知りたいこと・調べてみたいことなど
そういう気にならないうようにしたいです。
おもしろい

うれしい 楽しい こわい びっくり 悲しい

選んだ新聞記事をはりましょう

(図4：平成26年度2学期)

【事例1】

日 時	9月8日(月) 中高等部ミーティング時(男子寮)
当番舎生	Yくん(中学部2年)
選んだ新聞記事	
発表内容	<p>曾於市在住の脳性麻痺の男性が、足を使い絵を描いている記事を選び発表する。Yくんは、この記事に興味を持ち、足で絵を描くことはすごいと思ったことを伝えたが、他の舎生からあまり反応は見られなかった。</p> <p>障害について分からない様子で、一人の舎生から「脳性麻痺って何ですか。」と質問があった。Yくんは返答できず、当直の職員から簡単な説明をしたが、まだ理解できていない様子だった。</p> <p>Yくんは、みんなに伝えたいという思いから「図書館で調べて発表します。」と伝えた。</p>
	<p>Yくんは、翌日自分で図書館に行きパソコンで調べたが、内容が難しくまとめることができなかった。職員と一緒にパソコンで調べたことをメモし、翌日のミーティング時に発表した。</p> <p>『赤ちゃんがお腹の中にいる時から生まれるまでに起きた、脳の何らかの障害による運動の異常』</p>

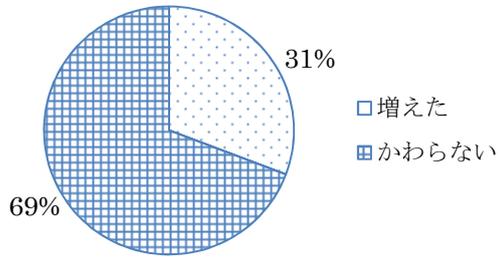
(ウ) アンケートの実施

新聞記事を発表するようになったことで、新聞に対する意識の変化や情報収集の方法を知るために平成26年12月に、アンケートを実施した。

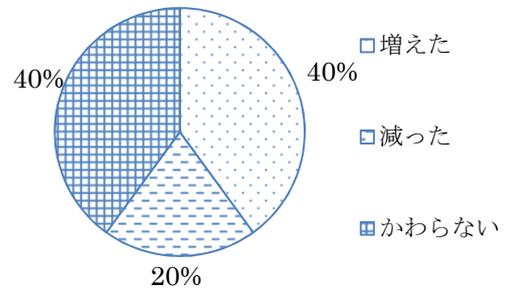
併せて、話題になったニュースや出来事をどれくらい知っているか、クイズも行った。

【アンケート結果】

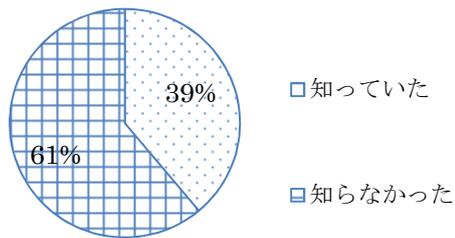
新聞を読む回数は増えましたか？
(男子寮)



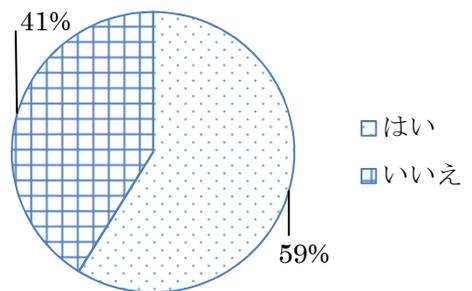
新聞を読む回数は増えましたか？
(女子寮)



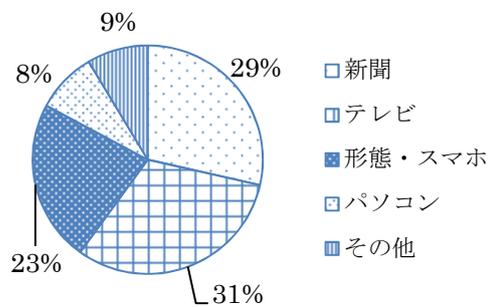
発表された記事は知っている
内容でしたか？



自宅で新聞を購読して
いますか？



ニュースや情報はどんな方法で
知りますか？



【クイズと正解率】

クイズ	正解	正解率
ギニアをはじめとする西アフリカで、最強の感染性と毒性を持つウイルスが原因となって発症した感染症は？	エボラ出血熱	44%
8月、代々木公園で蚊に刺されたことが原因とされる感染症が流行し、その後国内での感染者は100人を超えた。この感染症は？	デング熱	12%
9月27日、7年ぶりに噴火し多くの犠牲者を出した長野県と岐阜県にまたがる山は？	御嶽山	40%
8月20日、局地的な短時間大雨によって大規模な土石流が発生し、74人の犠牲者を出した。この災害が起こったのは何県？	広島県	36%
全米オープンで、男女通じて日本人初の決勝進出を果たし、アジア出身男子初のワールドツアーファイナルへ出場したテニス選手は？	錦織圭	32%
ディズニーのアニメーションで、主題歌の『レット イット ゴー』も大ヒットした映画のタイトルは？	アナと雪の女王	76%
6月12日から7月13日にワールドカップが開催され、ドイツが優勝した。ワールドカップの開催国は？	ブラジル	32%
今年のノーベル物理学賞は、日本人が受賞しました。何の発明で受賞しましたか？	青色LED	48%
2月7日から23日、ロシアのソチで冬季オリンピックが開催された。フィギュアスケートにおいて日本男子初の金メダルに輝いた選手は？	羽生結弦	44%
11月7日、鹿児島県知事と県議は、福島での原発事故以来、初めての原発再稼働に同意した。鹿児島県にあるこの原発の名前は？	川内原発	44%
小学生を中心に流行し、1月から販売が開始されたおもちゃのメダルは、入手困難となり、一躍社会現象となった。今年の流行語にもノミネートされたのは何？	妖怪ウォッチ	12%

(エ) 成果

- ・ 当番の時だけでも、新聞を見る回数が増えた。
- ・ 自ら積極的に取り組む様子はないが、社会的な情報を得る機会にはなった。
- ・ 他の人に分かりやすく伝えたり説明したりする経験になった。
- ・ テレビのニュース等への関心も増した。
- ・ 発表する内容を考えてまとめようとする様子が見られた。
- ・ 聞く側も、興味・関心を持つようになった。
- ・ 発表の仕方が上手になった。
- ・ クイズの答えを新聞から探し出す舎生もいた。

(オ) 課題

- ・ 日常的に新聞を読むことへはつながらなかった。
- ・ 「調べたいこと」や「もっと知りたいこと」があっても、自主的に調べて知ろうとする舎生はほとんどいなかった。

6 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

生活の中で、豊かなことばや知識を育むために、身近な新聞を活用した取組を行った。中・高等部生は、当番時に発表することで新聞に接する機会が増え、社会的な情報を得る機会にもなった。機会を重ねることで、他の人の興味があることへ関心を持ったり、分からないことを質問したりする場面もあり、質問を受けた側も分からなかった内容を調べて、発表することもあった。

記録用紙を工夫した平成26年度の2学期以降は、発表の仕方や内容をまとめて考える様子が見られた。選んだ理由の説明を加えたことで、聞く側も興味・関心を持つようになった。楽しい雰囲気の中で、コミュニケーションがとれる場面もあった。

また、新聞だけでなく、テレビのニュース等への関心も増し、食事中にテレビを見ながらニュースの内容を職員と話題にする機会が増えた。

(2) 今後の課題

当番活動の一環として、新聞記事を発表する場を設けたことで新聞を読む機会は増えたが、当番以外の日に新聞を読む舎生は限られており、日常的に新聞を読むまでには至らなかった。

周りの人の話をよく聞き、理解する力を付けることが、自分で考え選択し決定していく力につながっていくと考える。そのためには、「読む」「聞く」「書く」「話す」といった基本的な技能を身に付けることが求められる。

生活の中で豊かな言葉や知識を育てる取組は、短期間で大きな成果につながるものではないが、「知りたい」「伝えたい」という意欲を引き出すために、様々なメディアからの情報をいち早く提供できるような環境を作るなどの工夫をし、自ら学ぼうとする意欲の向上につなげていきたい。

編集後記

「研究紀要 第17号」が、上梓のはこびとなりました。

「学力向上」という学校教育の至上命題について、この3年間学部・寄宿舎において日々研究・実践されてきた教育活動の成果を集約しました。本県唯一の聾学校としての聴覚障害教育の中核的な役割を果たせるよう、研究を重ねてまいりましたが、本研究の成果を拡充させながら今後の教育活動の充実を図っていきたいと心を新たにしているところでございます。

この研究紀要第17号についての忌憚ない御意見、御助言などをお聞かせいただきましたら幸甚に存じます。

〈テーマ研修係〉

研究紀要 第17号

発行年月日 平成27年5月25日

発行者 鹿児島県立鹿児島聾学校
学校長 釘田 雅司

発行所 鹿児島県立鹿児島聾学校
〒890-8686
鹿児島市下伊敷一丁目52番27号
電話 099-228-2200
FAX 099-228-2211

編集 鹿児島聾学校 テーマ研修係